

第35回

福井県発掘調査資料

— 令和元年度に発掘調査した遺跡 —



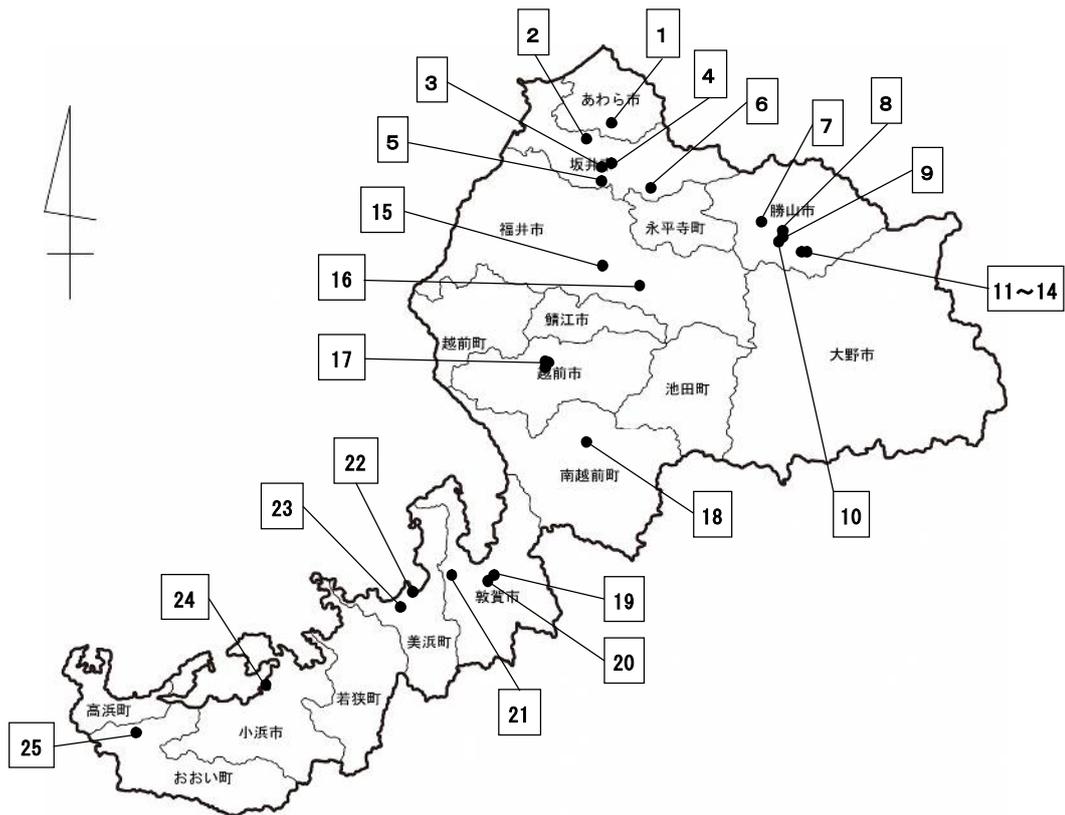
2020

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

目 次

①. 清間遺跡……………	4	14. 国史跡白山平泉寺旧境内……………	30
2. 大関東遺跡……………	6	15. 上河江原町遺跡……………	32
3. 長崎遺跡……………	8	16. 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡(第152次) 34	
4. 丸岡城……………	10	17. 越前国府関連遺跡調査……………	38
5. 寄安・栗森遺跡……………	12	18. 柚山城跡(居館跡)……………	42
6. 六呂瀬山古墳群……………	14	19. 中遺跡……………	43
7. 松田遺跡……………	16	20. 大町田遺跡(第5地区)……………	45
⑧. 勝山城跡・袋田遺跡……………	18	21. 沓見遺跡……………	47
9. 榎新田遺跡……………	20	22. 佐柿奉行所跡(准藩士屋敷跡)……………	49
10. 袋田遺跡……………	22	23. 高善庵遺跡……………	51
11. 国史跡白山平泉寺旧境内……………	24	⑭. 小浜城跡……………	52
⑫. 国史跡白山平泉寺旧境内……………	26	25. 石山城跡……………	56
13. 国史跡白山平泉寺旧境内……………	28		

※数字に○が付く遺跡には、本資料とは別に補足写真資料がありますので、
ご参照ください。



令和元年度県内発掘調査地点 (数字は目次番号と同じ)

せいまいせき
1. 清間遺跡

所在地：あわら市清間 20 字中館 22 番ほか

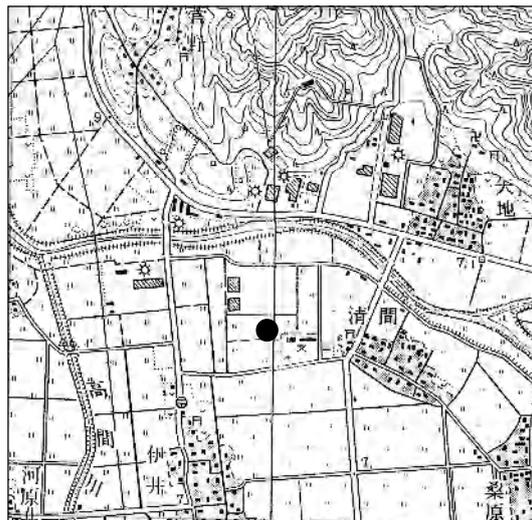
調査原因：新工場建設工事.

調査期間：令和元年 9 月 24 日～12 月 27 日

調査主体：あわら市教育委員会

調査面積：2,035 m²

時代：古代・中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 遺跡は、竹田川左岸の自然堤防上に立地し、玉作り集落跡として知られる伊井遺跡と西側で接します。本遺跡の発掘調査は 7 回目で、調査地点はこれまでで最も南側となる伊井小学校北西に位置しています。7 月に休耕中の水田で実施した試掘調査で、計画工場建屋内に設けた調査区 3 箇所全てで、遺構や遺物を地表下約 0.5～0.6m で確認したため、その全域の南北約 48m×東西約 43m を調査範囲としました。しかし、調査区西端は、過去の耕作により地表下 1 m 以上まで掘削が及んでいたことが明らかとなりました。南北方向でも一部が同様な状況であったため、これらの部分では人力による掘削等はいりませんでした。そのため、実質的な調査面積は約 1,200 m²にとどまっています。

遺構 調査の結果、掘立柱建物跡(SB) 1 棟以上、井戸 5 基(SE1～5)、土坑(SK) 35 基、溝(SD) 約 26 条、小穴(SP) 多数を検出しました。

掘立柱建物跡(SB1)は、1 間幅約 2.0～2.1m を基準とする東西 3 間(約 6.2m)×南北 4 間(約 8.2m)の規模の建物と考えられます。井戸 1 (SE1)は、木製曲物の井戸枠(写真 2)の存在から井戸と判明しましたが、他の 4 基は想定にとどまっています。溝は、直線状のものが多くを占め、大半が中世以降と判断されます。北側が調査区外のため未確認ですが、残り三方が隅丸方形の周溝状を呈する溝(SD1)を検出しました。東西長約 10m の墳丘が削られた方形周溝墓か方墳の可能性も残されています。重機掘削時にやや傾いて検出した完全な形の越前焼播鉢(写真 3)は、周辺をよく観察しましたが、明確な遺構は確認できませんでした。しかし、取り上げ後、その下から「〇武通宝」という古銭 1 枚を検出しました(写真 4・5)。

遺物 古代の須恵器、中世の越前焼などの陶器や土師質土器の出土が多く、過去の調査で多数確認された弥生土器や土師器の出土は少なく、これまでと様相が大きく異なります。その他、磁器類、管状土錘、瓦質土器風炉片、石臼片などが見られました。

まとめ 今回の調査では、完形の越前焼播鉢の下から洪武通宝と思われる中国明代以降の古銭が出土しており、地鎮などの祭祀が行われた可能性があります。また、茶道具の一種で、火を入れて釜をかけるための風炉片の存在は、中世期に一定の権威や教養のある人が周辺に居住していたことが想定されます。そのため、弥生時代末から古墳時代初頭頃が最も中心の遺跡には変わりませんが、中世にも栄えていたことが判明しました。(橋本幸久)

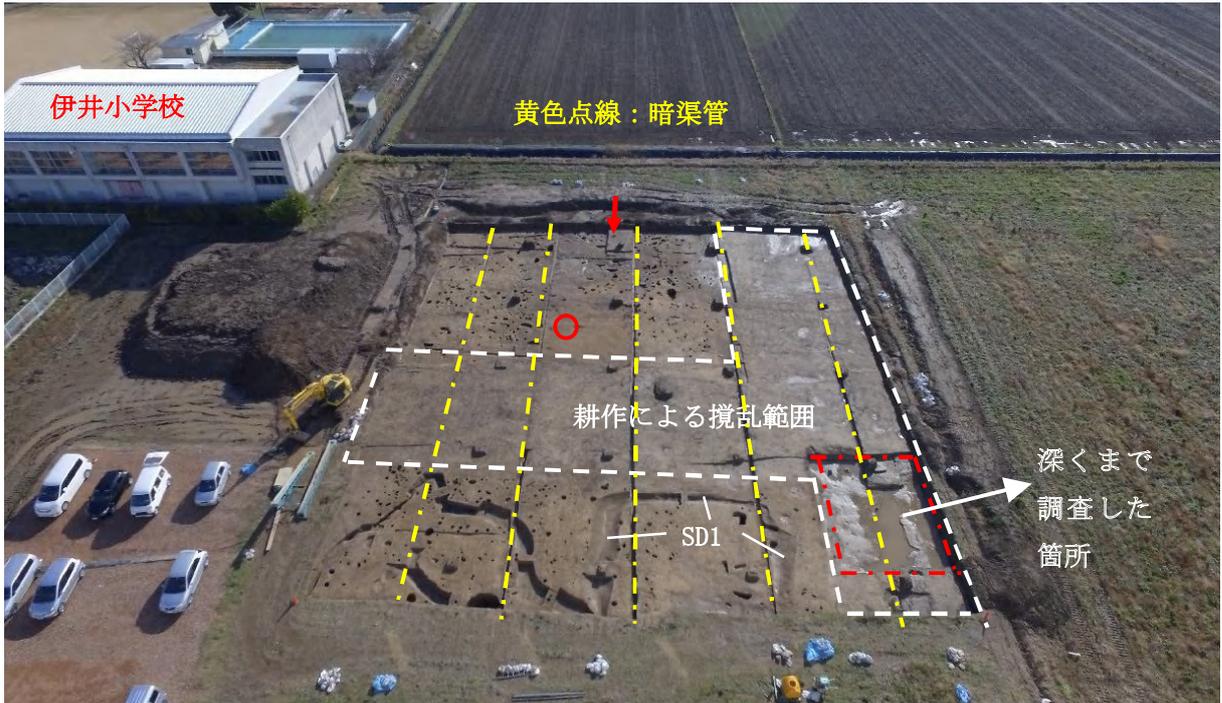


写真1 清間遺跡調査区全景俯瞰（北から）○ 井戸(SE1) ↓ 播鉢検出地点



写真2 井戸(SE1)の木製曲物の井戸枠(西から)



写真3 越前焼播鉢検出状況(北から)



写真4 播鉢取り上げ後、古銭検出状況(南から)



写真5 古銭検出状況近景(南から)と洗浄後

おおぜきひがしいせき
2. 大関東遺跡

所在地：坂井市坂井町東

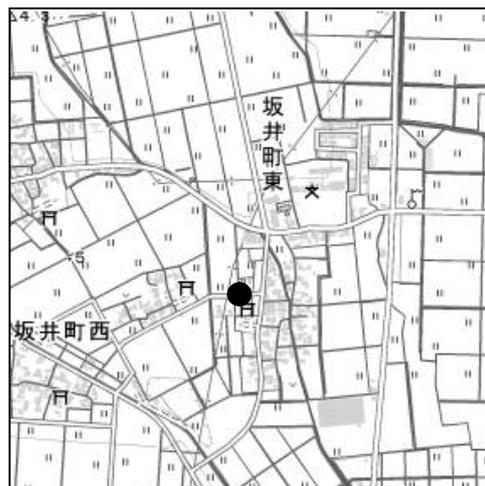
調査原因：北陸電力株式会社福井送配電支社
鉄塔坂井線 16 号建替工事に伴う
記録保存

調査期間：令和元年 9 月 30 日～10 月 19 日

調査主体：坂井市教育委員会

調査面積：約 81 m²

時代：弥生・古墳・平安・中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 大関東遺跡は、九頭竜川・竹田川・兵庫川・田島川流域の沖積平野で市中央部に広がる坂井平野に位置し、周辺の自然堤防の状況から、兵庫川の自然堤防上にある遺跡です。

市では、電力送配電用の鉄塔建設に伴い、試掘調査を実施した結果、溝状の遺構と遺物を確認したため、鉄塔建設予定地において、遺構や遺物を記録保存する目的として、調査を行いました。

遺構 過去、大関東遺跡内では、福井県による発掘調査や工事立会において、確認調査が実施されています。平成 8 年の調査では、特に 13 世紀中頃から後半にかけての遺構の密度が高く、土坑・井戸などがあり、地鎮祭祀と考えられる遺構も確認されています。平成 20・21 年の調査では、弥生時代の井戸、平安時代の井戸・土坑、中世の堀・井戸・溝が確認されました。

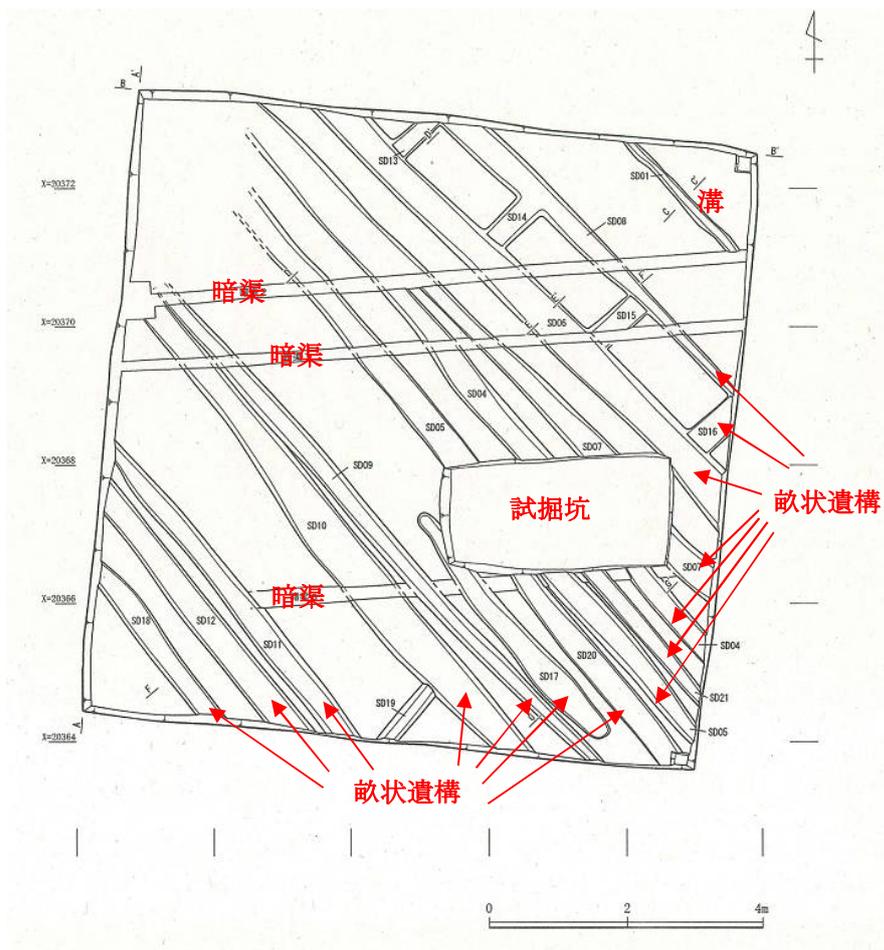
今回の調査場所は水田で、約 24～50 cm の耕作土の下層で、溝 1 条と畝状遺構の他、遺物を多く含む包含層が確認されました。溝も畝状遺構も、軸は主に南東から北西の方向であり、時代は 8～10 世紀と思われ、溝は幅や埋められた土が異なるため、畝状遺構とは別に造られたものと判断しました。

遺物 遺物は、畝状遺構から古代～中世の土師器や須恵器、青磁の碗が出土し、遺物包含層では、弥生時代終末期～古墳時代前期に作られた「月影式」と呼ばれる弥生土器等が出土しました。

まとめ 今回の調査では、近現代に大規模な削平を受けていること、確認された遺構や遺物がすくなかったことにより、遺跡の性格について、詳細を把握することは困難な状況でした。

遺構においては、本遺跡の中心的な遺構として、古代の 8～10 世紀の溝と畝状遺構が確認されました。しかし、過去の本遺跡の調査で確認された土坑や井戸等の住居に関連する遺構は確認できず、弥生時代終末期から古墳時代前期においても、遺物包含層から多くの遺物が出土しましたが、同時代の遺構は確認できませんでした。

中世の遺物の出土状況をはじめ、並行や交差する遺構の状況から、畝状遺構は数時期の作り替え等があったと可能性が考えられます。また、調査地周辺は、寺院領の荘園にも推定されており、同遺跡の過去の調査を考慮すると、一般集落とは違う様相であることから、条里制による区画整備との関係があったとも考えられます。(中田那々子)



調査区全景の遺構図



完掘の状況 調査区全景 (南側より撮影)



包含層出土の弥生土器

調査区は北側を1区、南側を2区としました。1・2区間の道路予定地部分は、来年度以降に発掘調査を行う予定です。以下に1・2区の検出遺構を簡単に記します。

1区 調査区の西端部は低地状となっており、遺構密度が増すのは川跡を境に中央西から以東です。中央部は土坑や柱穴、溝を中心とし、東半部は並行する東西方向の溝が主体です。柱穴には柱根が残るものもあります。溝は幅約1m、深さ0.8mの規模で共通し、断面は逆台形状です。これらは中世の遺構ですが、近世と考える縦板を組んだ井戸もありました。

2区 1区と同様に西端部は遺構密度が低いものの、中世以前の可能性がある溝を検出しました。中央から東部で中世の土坑、溝、柱穴、井戸などを検出しました。

出土遺物は、1・2区とも、13～15世紀の素焼きの皿、越前焼、中国産の碗や皿が多く出土しました。他に石製品、板材、銭貨などが出土しています。

まとめ 調査の結果、遺構の分布範囲から推定すると、称念寺を中心とする現在の門前の集落が立地する微高地は、本来、さらに南方から東方に延びており、この微高地上に今回の調査範囲を含む中世の集落が広範囲に展開していたと考えられます。 (野路昌嗣)



東から見た調査区の全景 (左：2区 右：1区)



左：柱穴の検出状況 中：残っていた柱の根元 右：井戸枠を持たない井戸

まるおかじょう
4. 丸岡城

所在地：坂井市丸岡町霞1丁目59番地

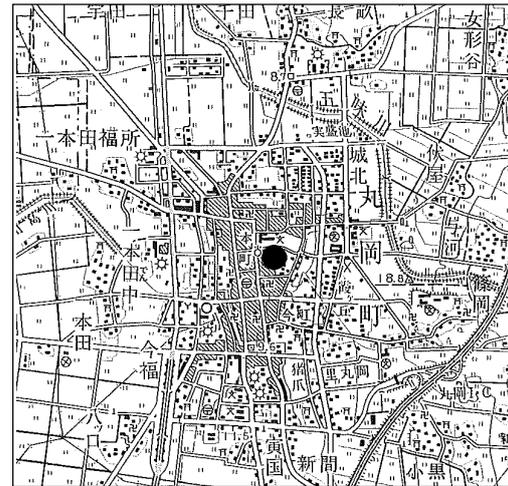
調査原因：内容確認

調査期間：令和元年7月1～30日

調査主体：坂井市教育委員会

調査面積：44 m²

時代：近世～現代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 丸岡城跡の本丸にあたる城山部の調査で、丸岡城天守の北東広場(通称天守前広場)と天守台の南で内容確認調査を実施しました。調査は天守以外の建物の規模や平面形を確認すること、天守台周辺の遺構確認を目的として行いました。

遺構

・天守前 東西6m、南北4mの調査区を設定して調査を実施しました。調査の結果、広範囲にわたって近現代に改変を受けたことが再確認できました。また、前年度の調査でも確認できた、本丸を成型・整地した黒色土の層が東よりに広がっていることが確認できました。

・天守台南トレンチ 前年度の調査トレンチを挟んで東西2カ所の調査トレンチを設定しました。東側のトレンチでは石垣の石材は抜き取られているものの、地山を堀窪めた溝状の根石の据え方を検出しました。昨年度の調査で検出した2本の石列のうち一つとラインが一致します。西側のトレンチでは、石垣の隅の部分が発見され、現在の天守台と地中で組み合っていました。このことから、現在の天守台と異なる形状をしていた時期があることがわかりました。丸岡城天守の総合調査で、地震で倒壊する前の天守台は木造部分よりも古い時代に作られた可能性があることが指摘されています。今回発見された石垣がそうした古い時代の石垣である可能性も考えられます。

また、見つかった石垣の南側に礎石が並んでいることが確認できました。礎石は直径60cmほどあります。現在残っている絵図には、天守南側に建物が描かれたものはありません。礎石の大きさからかなり太い柱が想定できます。

遺物 これまでの調査と同様、大量の石瓦が出土しています。

まとめ 新たに見つかった石垣は天守台構築当初まで遡る可能性があります。現在の天守の木造部分が寛永5年(1628)頃に造られたことがわかっている一方、天守台はさらに古い可能性が指摘されており、新たに見つかった石垣は柴田勝豊が築いた石垣の可能性も考えられます。現在の天守が整備される以前の様子を知ることができる貴重な成果になりました。

(堤 徹也)

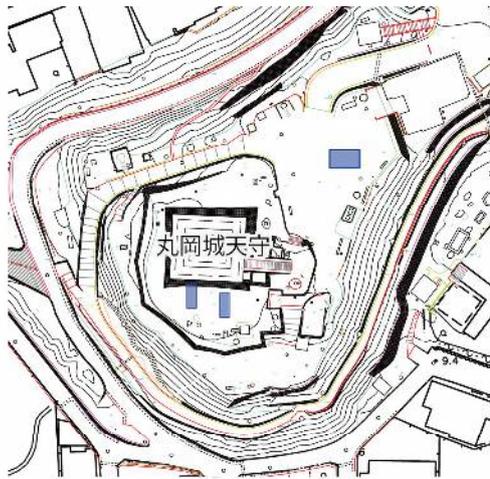


図1 令和元年度の調査場所
 ■が調査を実施した場所



写真1 天守前のトレンチ調査風景
 中央の落ち込みは人が隠れるほど深く掘られていました。

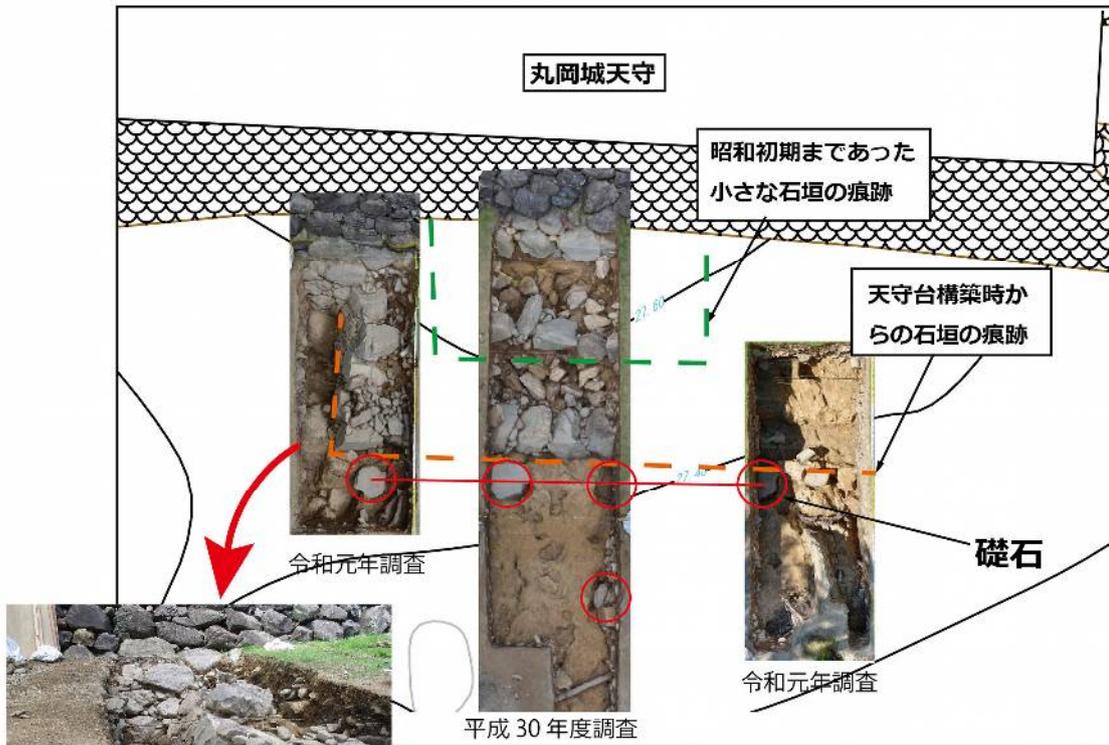


図2 天守南側調査地で見つかった古い石垣の様子

写真2 見つかった古い石垣の隅

よりやす くりもりいせき 5. 寄安・栗森遺跡

所在地：坂井市春江町寄安地係

調査原因：一般県道福井森田丸岡線道路改良工事

調査期間：令和元年6月3日～8月30日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：848 m²

時代：弥生時代後期末、鎌倉時代後期、室町時代前期



位置図 (S=1/50,000)

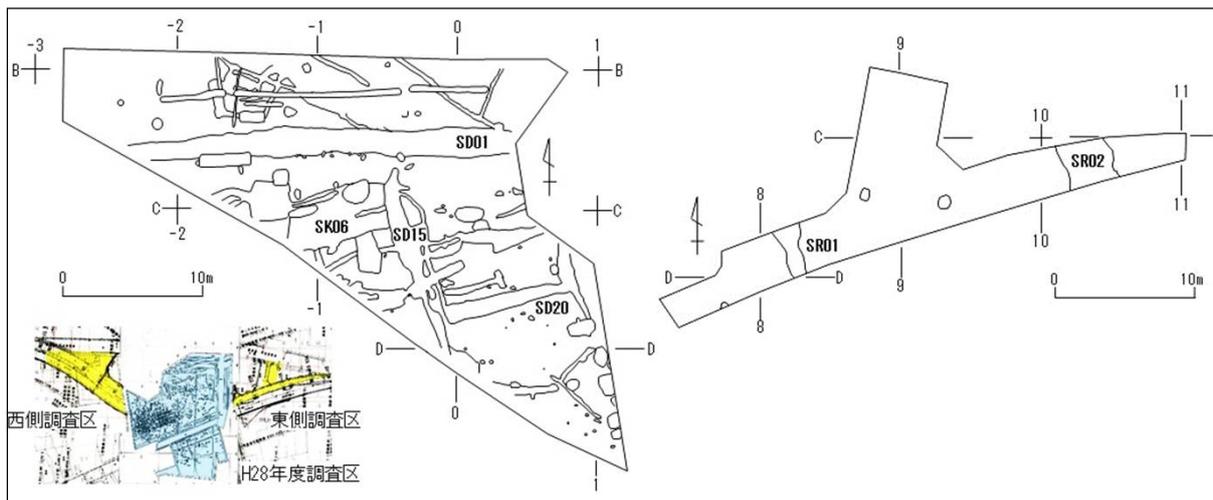
調査の概要 遺跡は坂井平野の南部に位置し、磯部川左岸の自然堤防上に立地します。西側調査区の旧地形は、大半が微高地で北端が低地にあたり、北方へ緩やかに傾斜しています。東側調査区の旧地形は低地であり、東方へ緩やかに傾斜していました。土層は、両調査区とも全体に現代の客土である褐色粘質土が堆積していました。次に微高地は、遺物包含層の暗黄灰色粘質土、地山である黄褐色粘質土又は砂質土、低地では埋土の暗青灰色粘土、地山である緑灰色粘質土の順で堆積していました。

遺構 西側調査区では溝 (SD) 29 条、土坑 (SK) 14 基、ピット (SP) 約 60 基を検出しました。調査区のほぼ全体に分布し、溝は大半が東西方向にのびます。土坑とピットは南半にややまとまる状況でした。SD01 は、位置や形状及び方向から H28 年度調査区の SD02 の続きであり、屋敷地境の溝と考えられます。SD15 は、他の溝と直交して南北方向にのび、屋敷地の区画溝と推察されます。SD20 は、人頭大の平石数点が底部付近でほぼ等間隔に据えられた状況で検出され、土師質土器皿や漆器椀等が出土しました。SK06 は、大形方形状で覆土上部から越前焼甕等と握拳大程の礫がまとまって出土しました。東側調査区ではピット (SP) 数基、旧河道 (SR) 2 条を検出しました。H28 年度調査区の SD01 が、調査区南端から区外にかけて現道下を南西から北東にのびると推察されます。

遺物 コンテナ 9 箱分あり、大半が西側調査区から出土しました。中世の土師質土器、越前焼、瀬戸美濃焼等の他に弥生土器も僅かにあり、木製品では漆器椀等が数点出土しています。包含層から 4 割、遺構から 6 割が出土し、特に SD01・15・20 と SK06 から多く出土しています。

まとめ 遺跡の時期は弥生時代後期末もありますが、鎌倉時代後期と室町時代前期が中心です。中世の二時期が重複しますが遺構の分布状況からみて、西側調査区の南東部は H28 年度調査区で検出した屋敷地の北西端にあたり、SD15 以西には他の屋敷地がひろがるとも考えられます。

(田中勝之)



第1図 調査区割と平面略図 (縮尺1/700・任意)



写真1 西側調査区全景 (南東より)



写真2 東側調査区全景 (南西より)



写真3 SD01 (東より)



写真4 SD20 (東より)



写真5 SK06出土遺物 (南より)



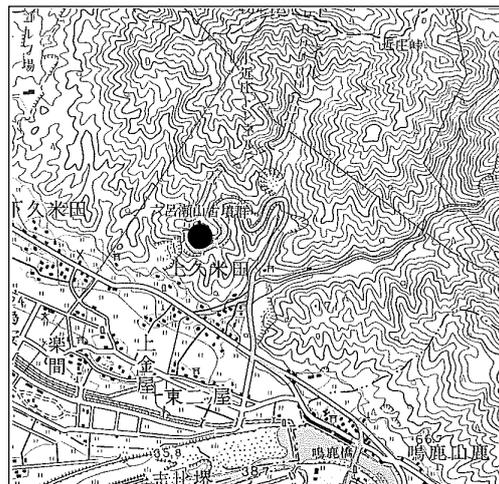
写真6 SD20出土遺物① (南より)



写真7 SD20出土遺物② (北より)

ろくろせやまこふんぐん
6. 六呂瀬山古墳群

所在地：坂井市丸岡町上久米田
調査原因：史跡整備に向けた範囲確認
調査期間：令和2年2月25日～3月19日
調査主体：坂井市教育委員会
調査面積：約4㎡
時代：古墳



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 六呂瀬山古墳群は、平成2年に国史跡の指定を受け、北陸最大級とされる全長約140mをもつ1号墳（前方後円墳）を含む4基の前期古墳で構成される古墳群です。

今回の調査対象地は、六呂瀬山1号墳後円部に平成31年度調査場所の南側にトレンチを設定して、墳形の基礎情報を確認する目的として行いました。

遺構 調査対象となった六呂瀬山1号墳は、標高約200mの山頂に立地しており、自然の尾根をうまく利用して築造されています。六呂瀬山1号墳後円部の平坦部から尾根上に、幅2m、長さ2mのトレンチを1本設定して調査を実施しました。また、地山を確認するため、トレンチの西側に幅1mのサブトレンチを入れて、さらに掘り下げを行いました。

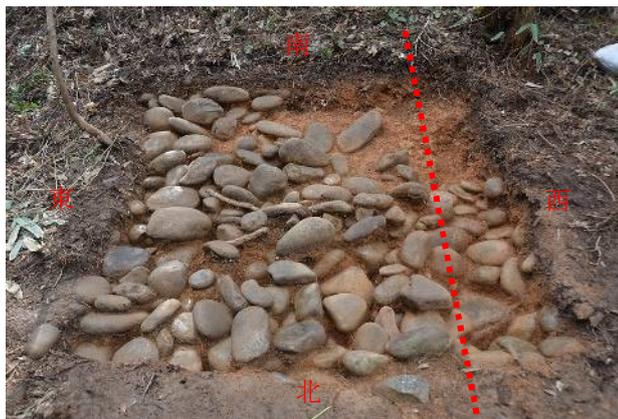
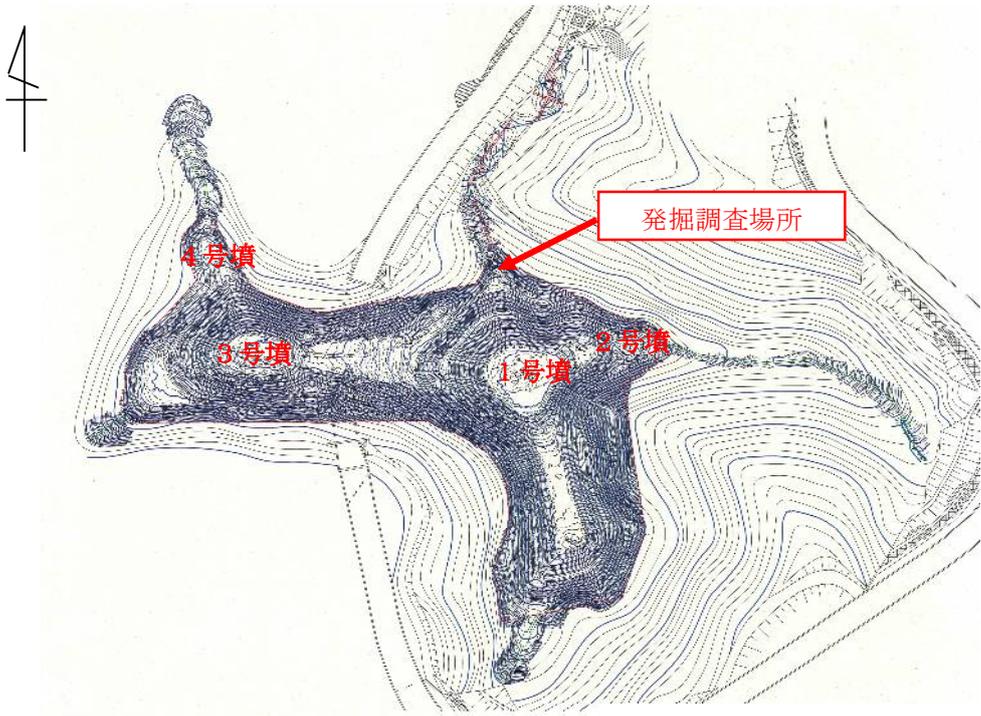
遺構は、表土からマイナス約20cm下で葺石が確認でき、さらに、表土からマイナス約40cm下で地山を確認しました。サブトレンチの南側は、ほぼ地山とその自然石であったため、葺石の多くは転落したものと考えられました。

なお、サブトレンチでは、転落してきたものと思われる葺石を取り外し、北側の葺石の状況を確認したところ、基底石は、今回の調査場所よりも北側にあるものと考えられます。

遺物 トレンチ北側周辺において、葺石の直上で円筒埴輪の破片が出土しました。また、サブトレンチでは、転落してきたものと思われる葺石を取り外す中で、円筒埴輪の破片が確認できました。

まとめ 今回の調査では、サブトレンチで出土した円筒埴輪の破片の位置よりも下で確認できた葺石の一部は、築造当時の葺石もあると考えられます。特に、築造当時の葺石と考えられるサブトレンチの北側の葺石の状況から、古墳を形づくる埴裾の石である基底石は、さらに、古墳後円部の下方にあるものと考えられます。

これにより、六呂瀬山1号墳では、平成30年度に発掘調査で埴裾ラインと推測した位置にある葺石が基底石である可能性が高いものと考えられます。 (中田那々子)



50 cm幅だけ葺石を取り外した状況
(北側より撮影)



完掘の状況
西側に1 m幅のサブトレンチを設定
(北側より撮影)

まったいせき 7. 松田遺跡

所在地：勝山市荒土町松田 13 字西欠ノ上

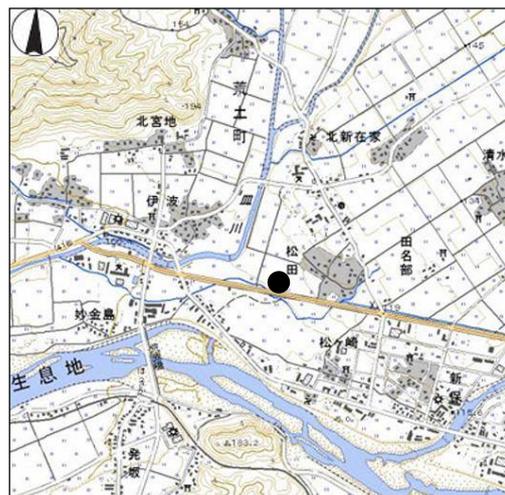
調査原因：土砂採掘工事

調査期間：令和元年 12 月 10～24 日

調査主体：勝山市教育委員会

調査面積：94 m²

時代：奈良・平安時代～江戸時代



位置図(S=1/50,000)

調査の概要 松田遺跡は、勝山市中心部から北西に約 3 km 離れた地点に位置し、九頭竜川によって形成された河岸段丘の段丘面に立地します。土砂採掘に伴う事前の試掘調査では、一部の範囲で古代から中世に属する遺構と遺物を確認しており、令和元（2019）年 8 月、遺跡範囲をさらに西側に拡大をすることになりました。遺構などを確認した範囲は、工事範囲から除外して遺跡を保存することにしましたが、その境の壁面でも遺構の一部が確認されたため記録保存を実施しました。

遺構 土坑 1 基、小穴 6 基、溝 1 条などを発見しました。溝は、最大幅が 2.6m で残存する深さが 1.2m を測ります。現況の地境に隣接した場所で検出しており、地境に並行していることが確認されました。この他、幅 0.55m、残存する深さ 0.35m を測る土坑からは須恵器や土師質土器が出土しました。

遺物 コンテナ箱数でいうと 1 箱程度出土しており、種類は、石製品、土師質土器、須恵器、瀬戸美濃焼などが見られました。0.1～0.3m の厚さで堆積している遺物包含層からの出土が多く、遺構からの出土は少ないのですが、遺構出土のものは、9 世紀から 10 世紀前葉に帰属します。このうち土坑で見つかった須恵器の鉄鉢は、市内で初めて出土したもので、土師質土器の甕と共に見つかりました。



須恵器 鉄鉢

まとめ 今回の調査は、壁面のみという限られた範囲でありましたが、土坑から市内で初めて須恵器の鉄鉢が出土するなど大きな成果が得られました。松田遺跡は、平成 10（1998）年に行った発掘調査の結果から、縄文時代を中心とする遺跡と考えられてきましたが、古代の集落跡も含まれていることが確認され、市域における古代の様相についてまた 1 つ情報が蓄積されました。

(藤本康司)



地境と溝の断面（南から）



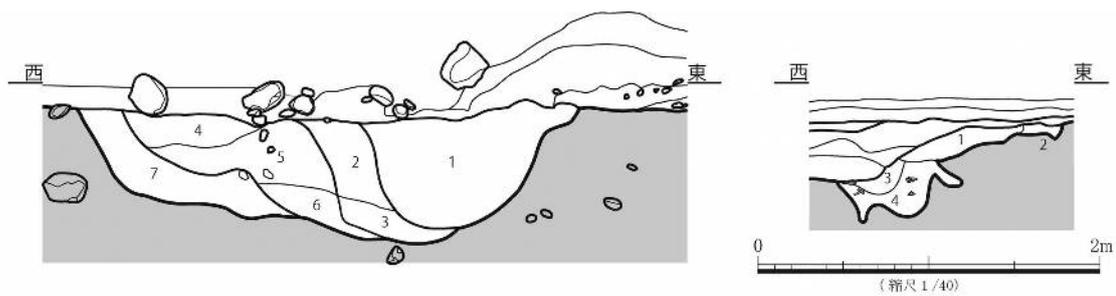
溝 近景（南から）



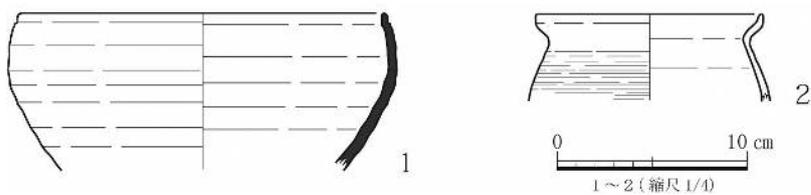
土坑の断面（南西から）



土坑 近景（南から）



遺構断面実測図（左：溝、右：土坑）



土坑出土遺物実測図（左：須恵器の鉄鉢、右：土師質土器の甕）

かつやまじょうあと ふくろ だいせき 8. 勝山城跡・袋田遺跡

所在地：勝山市元町1丁目、本町2・3丁目

調査原因：一級河川大蓮寺川改修事業

調査期間：令和元年6月3日～令和元年11月29日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

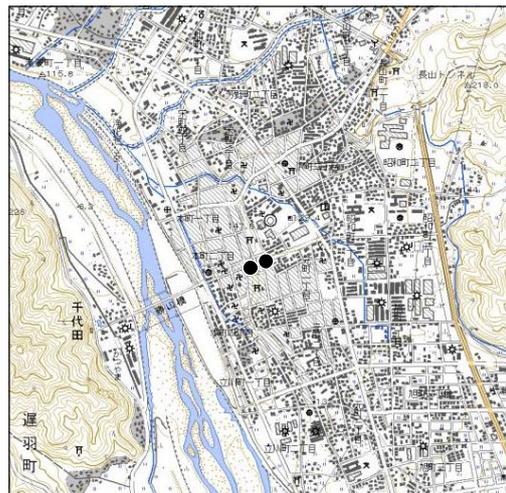
調査面積：1区 366 m² (183 m²×2面)

2区 640 m² (160 m²×4面)

合計 1,006 m²

時代：縄文時代晩期～弥生時代中期、

弥生時代終末期～古代、中世、近世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 勝山(袋田)城は、天正8(1580)年に柴田勝安によって築城されましたが、いわゆる一国一城令により、元和元(1615)年に廃城となっています。その後、小笠原貞信が勝山藩に移り、元禄4(1709)年に幕府から築城を許され、文政10(1827)年まで、城郭や城下町の再建、整備が行われました。明治4(1871)年にこの城も廃城となっています。以降、都市計画などにより堀や土塁などは失われ、天守台や石垣も市民会館建設により昭和40年に取り壊されました。

過去に勝山城跡や袋田遺跡では、銀行の建設や電線地中化工事に伴い、勝山市教育委員会により調査が実施されています。前者では、馬出の堀の一部が確認され、後者では三之丸の堀や七里壁、寺院など勝山城やその城下町に関連する遺構のほか、弥生時代から古代の遺構も良好に残っていることが分かっています。

勝山城が描かれた絵図は10数点が残っていますが、元禄期のものが最も古いものです。これらの絵図によると、1区が城郭の土居や城郭と城下町を分ける七里壁、成器堂(勝山藩校)が所在していた箇所該当します。2区は城下町にあたり、町屋や寺院(正等寺)が位置し、「元禄勝山城下絵図」によると、現在の本町通りや後町通りに沿って家屋が密集している様子が描かれています(図1)。

遺構と遺物

1区 近世(第1遺構面と呼ぶ、17世紀以降)と中世後期(第2遺構面、15～16世紀)の遺構を確認しましたが、調査区東側は、元禄線の道路を造る際に削平されたと考えられます。

第1遺構面では、七里壁と想定する2、3段の石垣を確認し、この石垣の下方には犬走状の段が2段確認しました(図2)。その他の遺構として、調査区西側で石組みの井戸1基を調査しました。今回の調査で見つけた井戸は石組または素掘りのものばかりで、木組のものは見られません。

第2遺構面は、用途不明の大小さまざまな穴や石組みの井戸を確認しています。また、調査区西側は自然に埋まった窪地(旧河川の可能性もある)であり、この谷の埋土から中世後期の陶器が出土し、この時期に埋没したと考えています。15～16世紀の陶磁器が主に出土しました。

2区 大きく分けると4つの時期の遺構の調査を行いました。近世（第1遺構面、17世紀以降）、中世（第2遺構面、15～16世紀）、弥生時代終末期～古代（第3遺構面）、縄文時代晩期～弥生時代中期（第4遺構面）を確認しましたが、調査区東側の一部は現代の工事などにより、削平されてしまったと考えています。

第1遺構面は、井戸4基、建物の柱材を据えるための穴（以下、柱穴と呼ぶ）20基以上、大きな穴（以下、土坑と呼ぶ）18基、石組みの遺構などをみつけました。狭い調査区でしたが、比較的多くの井戸が確認でき、家1軒に対し1基の井戸を保有していた可能性があります。また、四辺を川原石によって囲われた土坑や断面の形がフラスコ状をした土坑が確認でき、溜枘または貯蔵庫として機能していたと想定しています。17世紀以降の陶磁器や石臼などの石製品が出土しました。

第2遺構面では柱穴や用途不明の小さな穴（以下、小穴と呼ぶ）20基などをみつけましたが、遺構は多くなく、出土した遺物も少量でした。14～16世紀の陶磁器が主に出土しています。

第3遺構面は、出土遺物が少なかったため、その時期を特定する手がかりがありませんでしたが、周辺で行っている調査や出土した土師器の小さな破片から考えると弥生時代終末期から古代の遺構面であると想定しています。この遺構面では小穴が約15基みつけられました。古代以前の土器は1区では出土していないため、段丘下位にこの時期の遺構が広がっている可能性があります。

第4遺構面では、旧河道をみつけました。縄文時代晩期や弥生時代中期の土器、打製石斧が出土しています。

まとめ 本年度の調査は、狭い調査範囲であったが、七里壁と想定する石垣や城下町に関連する遺構などを調査することができ、比較的良く遺構が残っている状況が確認できました。来年度以降も引き続き調査を実施する予定ですので、絵図に描かれた勝山の街並みがより明確になることが期待しています。

また、近世遺構面の下層には、絵図が残っていない中世の遺構が広がり、今まで明確ではなかった遺跡の様相を確認することができました。柴田氏が治めていた時期の城下の様子やそれ以前の集落の様子についても、今後より具体的にになっていくことを想定しています。

（三原翔吾）

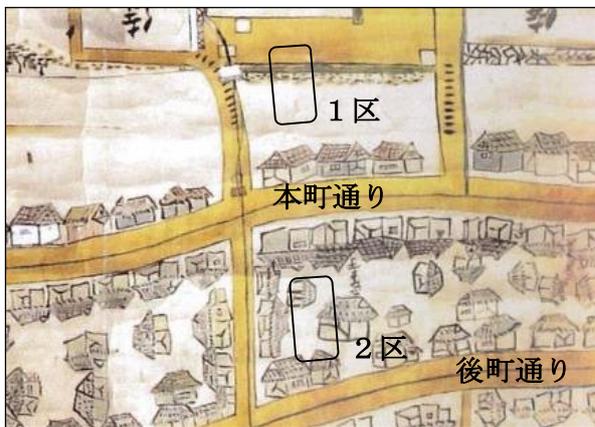


図1 元禄勝山城下絵図と調査区位置図



図2 七里壁と想定する石垣（1区、南西から）

えのきしんでんいせき
9. 榎新田遺跡

所在地：勝山市旭町2丁目216

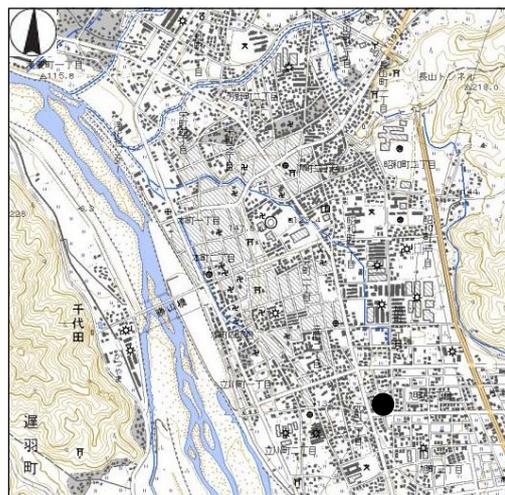
調査原因：個人住宅の建設工事

調査期間：平成31年4月4～22日

調査主体：勝山市教育委員会

調査面積：約82.4㎡

時代：奈良・平安時代～室町時代



位置図(S=1/50,000)

調査の概要 榎新田遺跡は、平成30年(2018)に実施した分布調査で元町近辺にて縄文時代から江戸時代の土器などが発見されたことから、袋田遺跡とともに新規登録されたものです。遺跡は、勝山市役所から約1.4km南方に位置し、立川町2丁目、元町3丁目、旭町2丁目一帯に広がっていると想定され、九頭竜川右岸の河岸段丘上に立地します。

今回の調査は、個人住宅の建設に伴って実施しました。調査地は当遺跡範囲の中央付近にあたり、近隣には個人住宅が建ち並んでいます。榎新田遺跡としては2回目の発掘調査であり、調査の結果、平安時代(9世紀後半～10世紀初め)を中心とした遺構や遺物が見つかりました。検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、溝1条です。溝は、人為的に掘削された用水路と考えられますが、室町時代になると埋没したことがわかり、土地利用の変遷が確認されました。

遺構 掘立柱建物1棟、柱穴・小穴19基、溝1条、柵列1条などが見つっています。このうち、溝1条は、幅1.7m、残存する深さ0.35mを測ります。南北方向に走り、底面の勾配から南から北へと水が流れていたと考えられます。溝の覆土からは9世紀後半～10世紀初めの遺物が出土しました。掘立柱建物1棟は、1間×3間の規模で、主軸を北から東に振っています。柱穴は径0.3m前後で、残存する深さは0.15～0.35mでした。柱穴から遺物が出土しなかったため、時期は不明です。

遺物 破片数で約100点あまりの土師質土器や須恵器、陶磁器などが見つかりました。中世の遺物と比較すると、古代の遺物の方が多く出土しています。ほとんどが破片ですが、これは後世の攪乱による影響を受けたためかもしれません。

まとめ 市内における発掘調査例が蓄積された結果、8世紀後半以降に属する集落跡が各地に見られることがわかってきました。これは、市域における古代の中心地であったという毛屋郷を中心に、土地が開墾され、集落の分布が拡大していったためと考えられます。それには、聖武天皇により天平15(743)年に発布された墾田永年私財法の影響が大きいのではないかと推測されます。

(藤本康司)



調査地点と周囲の状況（南から）



溝 近景（北から）



溝底より出土した須恵器（北から）



溝 全景（北から）



溝に流れる水路【復元】（北から）



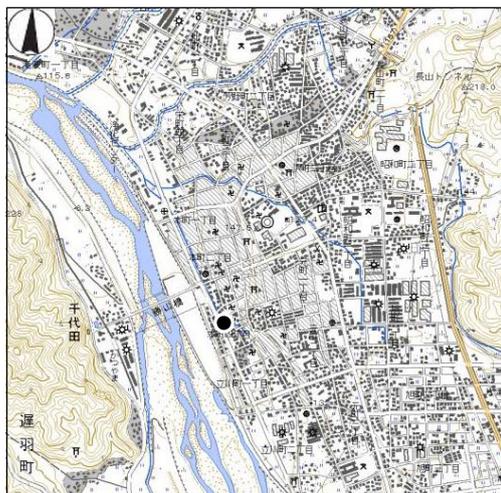
掘立柱建物【復元】（南から）



調査風景（北から）

ふくろ だいせき 10. 袋田遺跡

所在地：勝山市元町2丁目 地係
調査原因：下水道管理設工事
調査期間：令和元年5～6月、令和2年1・3月
調査主体：勝山市教育委員会
調査面積：約700 m²
時代：奈良・平安時代～江戸時代



位置図(S=1/50,000)

調査の概要 袋田遺跡は、平成30年(2018)に分布調査を実施し、勝山市役所を中心に北は芳野町2丁目、南が立川1丁目までの広い範囲で縄文時代から江戸時代の土器などが見つかったことにより新規登録されました。遺跡は、平成31年(2019)、文化庁が認定する「日本遺産」の構成文化財に登録された「七里壁」沿いに分布し、九頭竜川の右岸の河岸段丘上に立地します。下水道管理設のため幅員1mと限られた範囲で、遺跡登録後初めての発掘調査でしたが、明治29(1896)年の勝山大火による火事場整理層や元禄4(1691)年小笠原氏が勝山へ入部以降に形成された城下町の遺構面を確認できました。また、後町通近辺では、奈良時代の集落跡が見つかりました。

遺構 現在の元禄線沿いに位置する歩道の下を調査しました。調査地は町人が住む勝山城下町に含まれることから、地山面の直上にある堆積層には、中世から江戸時代の土器を含む遺物包含層がきれいに堆積していました。僅かながら、発見した遺構は、土坑3基、小穴1基、井戸1基などです。

遺物 出土量はコンテナ箱数でいうと1箱程度ですが、勝山城下町の町人が使用したであろう肥前陶器のほか、中世の瀬戸美濃焼や奈良時代後半に比定される須恵器と土師質土器などが見つかりました。そのうち、土坑からは市内で出土事例のない奈良時代に帰属する金属器を模倣した土師質埴や土師質甕が発見されました。

まとめ これまでは、勝山城下町の歴史を知るには古文書史料が中心でした。しかし、発掘調査によって、城下町の町人たちがどのような生活道具を用い、どのような暮らしをしていたのか、古文書ではわからない姿をより具体的に知ることができます。そして、さらに奈良時代にまで遡る集落跡が見つかり、勝山の古代を知る上で貴重な発見となりました。

(藤本康司)



調査地土層断面(南から)



越前焼 壺 出土状況(火事場整理層) (南から)



土坑検出状況(西)から



土師質土器 甕(土坑出土)



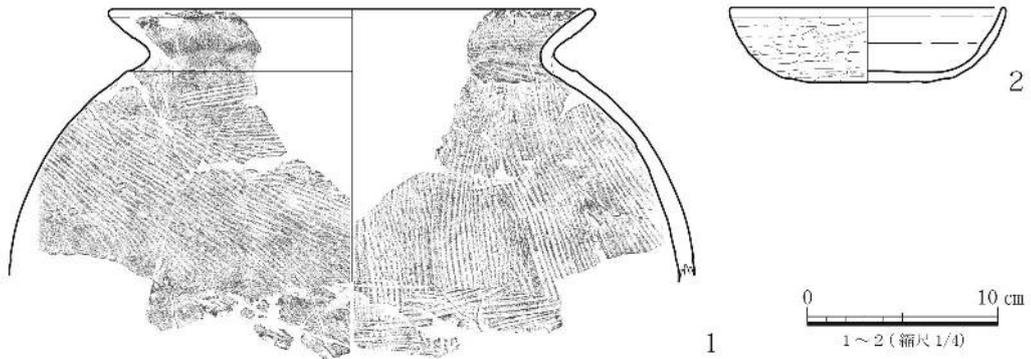
土師質土器 碗(土坑出土)



土師質土器 碗 (外面接写)



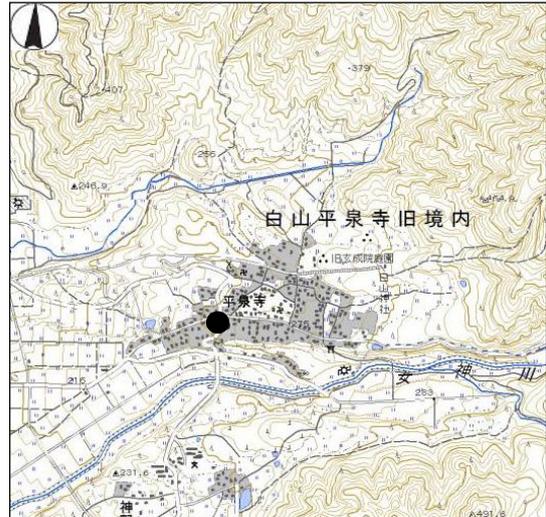
土師質土器 碗 (内面接写)



土坑出土遺物実測図 (左：土師質土器 甕、右：土師質土器 碗)

くにしせきはくさんへいせんじきゅうけいだい 11. 国史跡白山平泉寺旧境内

所在地：勝山市平泉寺町平泉寺 114 字梶ノ宮
調査原因：現状変更（バス停移設【公共】）
調査期間：令和元年 6 月 17 日～7 月 29 日
調査主体：勝山市教育委員会
調査面積：34.74 m²
時代：室町時代～明治時代



位置図(S=1/50,000)

調査の概要 平成 31 年（2019）、文化庁が認定する「日本遺産」の構成文化財に登録された国の史跡指定を受ける白山平泉寺旧境内は、白山信仰の越前側拠点寺院跡です。平泉寺の最盛期である室町時代には、48 の社や 36 の堂、6000 の坊院が建ち並んでいたと伝えられ、宗教都市として繁栄を極めていたと考えられます。しかし、天正 2 年(1574)、越前一向一揆との争いに敗れ、全山焼亡しました。

平泉寺の発掘調査は、平成元年（1989）から始まり、全国でも類を見ない規模の中世の石畳道や石垣が確認されています。今回の調査地点は、平泉寺白山神社本社から約 800m 南西に位置し、境内の南側に広がる「南谷坊院跡」にあたります。

遺構 土坑 1 基、柱穴・小穴 6 基、溝 1 条、落ち込み 1 基などを検出しました。特筆すべきことは、東西方向に走る現況の道路と並行した浅い溝を検出したことです。溝には大小の川原石が投げ込まれた状況でした。また、江戸時代から明治期までに構築されたと考えられる落ち込みには、東西方向に石列が配置されていました。

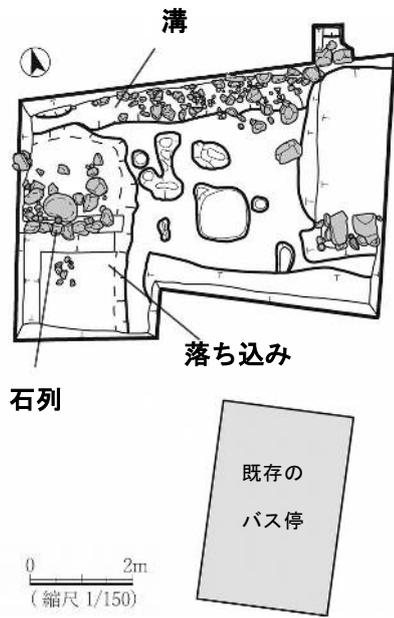
遺物 破片数で約 150 点あまりの土器・陶磁器や土製品が見つかりました。種類は、多岐にわたります。特に注目される遺物は溝から出土した土鈴です。土鈴は、当遺跡での出土事例が少なく、南谷の坊院内での生活を考える上で貴重な資料といえます。

まとめ 調査地点は道路が縦横に走る角地でしたが、土塀や坊院の出入り口の痕跡は確認できませんでした。また、石列を伴う落ち込みからは 19 世紀の伊万里焼が見つかり、中世のものではないことがわかりました。溝は底面が浅い丸底を呈し、覆土に大小の河原石を含むことから土塀の基礎とも考えられますが、断定するには至りませんでした。なお、発見された遺構は埋め戻し、地中に保存しています。



伊万里焼出土状況（落ち込み）

（藤本康司）



調査地点平面図



調査地点と周囲の状況（東から）



石列【裏側】（南から）



石列【表側】（北西から）



溝 全景（東から）



溝 土層断面（東から）

くにしせきはくさんへいせんじきゅうけいだい 12. 国史跡白山平泉寺旧境内

所在地：勝山市平泉寺町

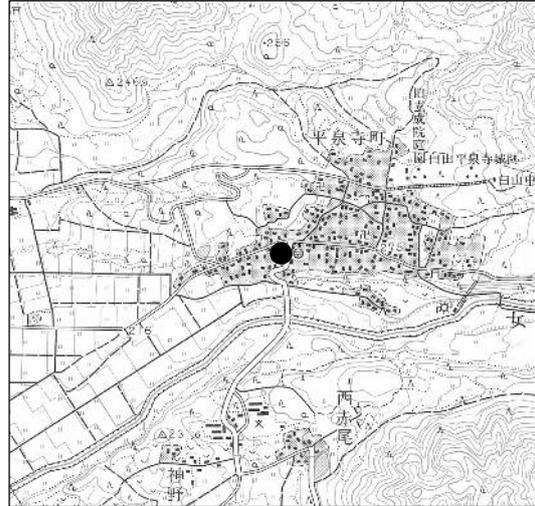
調査原因：県道改良事業

調査期間：令和元年8月26日～10月31日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：195 m²

時代：中世



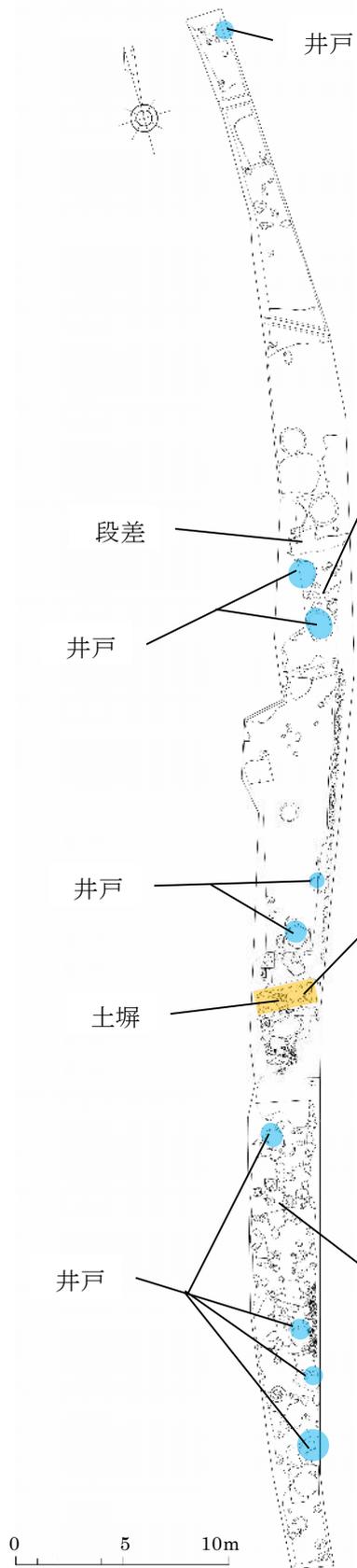
位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 国史跡に指定されている白山平泉寺旧境内は、勝山市中心部より南東約4kmの三頭山（標高777.5m）南西麓に位置します。平泉寺は「四十八社三十六坊六千坊」と称されているように、中世において多くの坊院が境内に密集していたと考えられていました。今回の調査地は、境内の南西端にあたり、境内の内側と外側を画する「構口門」から東へ約100mの場所に位置しています。本調査区を南北に沿う県道向かい側の地点で行われた勝山市教育委員会による発掘調査では、中世の建物や道路に伴う土塀を一部確認しており、今回の調査においても中世の坊院を確認することができました。

遺構 中世の土塀1基、井戸10基、土坑8基、多数の柱穴などのほか、近世以降の石垣などの遺構を確認しました。以下では、主に中世の遺構を説明します。土塀は坊院同士を区画する遺構で、本調査区には少なくとも二つの坊院があることがわかりました。また、高さ約1.2mの段差は、坊院内もしくは坊院同士を区画する遺構と考えています。そして、本調査区から確認された多くの柱穴から、坊院内には複数の掘立柱建物があったと推定しています。平泉寺では通常、客間や仏間からなる主屋の柱には礎石で根元を支えることが多いため、本調査区で確認された掘立柱建物は、生活に密接した比較的簡易な建物であると推測できます。また、生活用の水を汲み取る井戸がこれらの建物に接して多く確認できたことから、この場が飲食などの日常生活を営む場所であったことを考えさせます。出土遺物や文献記録から、平泉寺が焼亡した16世紀および15世紀以前の時期にこれらの遺構が形成されたと考えています。

遺物 越前焼・瀬戸美濃焼の甕・壺・播鉢・天目茶碗・卸皿（貯蔵具や調理具、茶道具）、中国産磁器の碗・皿（食膳具）、土師質皿（灯明具や食膳具）、瓦質の鉢（暖房具）、五輪塔、粉引き臼、砥石、曲物、箸、銅銭など、僧侶たちの日常生活に関わる遺物が出土しており、15・16世紀の遺物を多く確認できます。また、近世・近現代の遺物も少量出土していますが、縄文～弥生時代の打製石斧や弥生時代の太形蛤刃石斧も出土しています。

まとめ 今回の調査によって、土塀によって計画的に区画された坊院群が境内南西側にまで広がっていることをあらためて確認することができました。また、掘立柱建物や井戸という坊院の日常生活を強く示す遺構を確認できたことも重要な成果です。（松本泰典）



井戸（南東から）



土塀（東から）



柱穴群（南西から）

くにしせきはくさんへいせんじきゅうけいだい 13. 国史跡白山平泉寺旧境内

所在地：勝山市平泉寺町平泉寺 114 字梶ノ宮

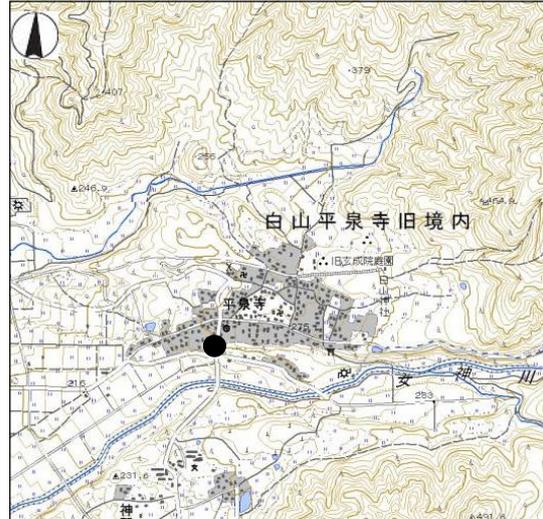
調査原因：現状変更（車庫建設工事）

調査期間：令和元年 7 月 25 日～8 月 15 日

調査主体：勝山市教育委員会

調査面積：40.2 m²

時代：室町時代～明治時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 県道平泉寺大渡線の県道拡幅工事に係る車庫の新築工事に伴い、発掘調査を実施しました。今回の調査地点は、平泉寺白山神社本社から約 820m 南西に位置し、境内の南側に広がる「南谷坊院跡」にあたります。

遺構 調査地には、車庫が建っていた事も影響し、大半が後世の攪乱の影響を受けていましたが、土坑 1 基、柱穴・小穴 26 基などを発見しました。調査時の現況では、除去した車庫が建つ平坦面と西側に隣接する既存の宅地には、段差がありました。調査を進めると、その段差は、坊院の境界にあったと考えられる高低差を利用したものであることが確認できました。つまり、調査地の西側に立地する既存の宅地は、近代になって低い方の区画面を盛土によって嵩上げしたものであったことがわかりました。

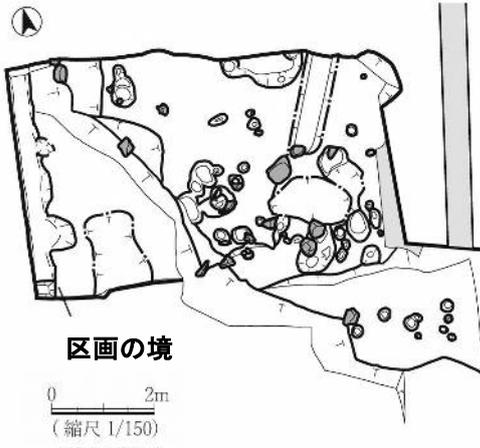


区画の高低差（南西から）

遺物 破片数で約 95 点あまりの土器・陶磁器や土製品、石製品、金属品が見つかりましたが、江戸時代から明治期にかけてのものが大半でした。

まとめ 調査地点は、現況の道路に接していましたが、土塀の痕跡が見つからなかったことから、中世の道路は、もう少し東側に寄っていた可能性が考えられます。

調査地については、除却した建物類の影響により当時の坊院の様子については不明な点が多いですが、坊院の敷地造成に伴う高低差を利用した区画を確認できたことが大きな調査成果です。
(藤本康司)



調査地点平面図



建物等の除去後（南から）



遺構検出状況（南から）



遺構完掘状況（南から）



調査地点と周囲の状況（南から）

くにしせきはくさんへいせんじきゅうけいだい
14. 国史跡白山平泉寺旧境内

所在地：勝山市平泉寺町平泉寺 115 字下村屋敷南

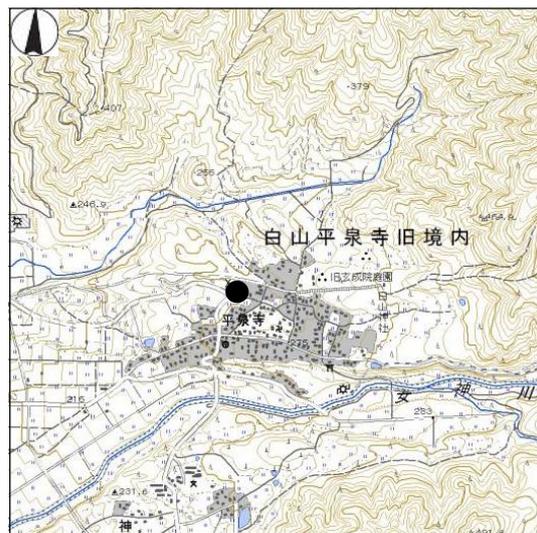
調査原因：現状変更（住宅建設工事）

調査期間：平成 31 年 4 月 19～25 日

調査主体：勝山市教育委員会

調査面積：105.7 m²

時代：鎌倉時代～江戸時代



位置図(S=1/50,000)

調査の概要 先に建っていた住宅を除去後に新たに建設される個人住宅について、発掘調査を実施しました。調査地点は、先の建物等の影響により遺構面の大半が削平を受けていました。しかし、室町時代に属する井戸などが見つかり、宗教都市として繁栄を極めていた当時の坊院の様相が伺えました。なお、今回の調査地点は、平泉寺白山神社本社から約 785m 南西に位置し、境内の南側に広がる「南谷坊院跡」にあたります。

遺構 調査する前の現地には、住宅が建っていた事も影響し、調査地の大半が後世の攪乱と削平の影響を受けていましたが、井戸 7 基（素掘り井戸 6 基、石組井戸 1 基）、土坑 17 基、柱穴・小穴 32 基などを発見しました。また、調査地点の南半分では、江戸から明治にかけての馬屋を想像させる落ち込みと、その肩部を護岸する石列を検出しました。

調査地は、現況では平坦ですが、調査の結果調査地点南側は元々は斜面であり、中世の坊院造成に伴って、整地されたものであることがわかりました。

遺物 破片数で約 200 点あまりの土器・陶磁器や石製品が見つかりました。種類は、多岐にわたりますが、発掘すると坊院からほぼ出土する通例の生活用品ばかりです。ほかには、鎌倉時代後半の素掘り井戸からは、多量のかわらけが投棄された状況で出土しました。遺構から出土した土器などの多くは、鎌倉から室町時代に帰属する資料でしたが、調査地を覆う整地層からは江戸時代に属する肥前陶器などが見つかりました。

まとめ 調査地点については、除去した建物や後世の攪乱により坊院は削平を受けており、礎石を伴う柱穴などを発見したものの建物跡などの復元には至りませんでした。しかし、素掘り井戸から多量のかわらけが出土しました。平泉寺における先の調査でも、同様の事例が確認されており、坊院内での井戸の扱われ方を知る上で貴重な例となりました。

(藤本康司)



調査地点と周囲の状況（南から）



調査地 全景（北西から）



礎石を伴う柱穴1（南から）



礎石を伴う柱穴2（西から）



素掘り井戸 全景（南から）



かわらけ出土状況（素掘り井戸）（北から）



石列を伴う落ち込み 全景（西から）



石列 近景（東から）

かみ こぎた え はらまち い せき
15. 上河北江原町遺跡

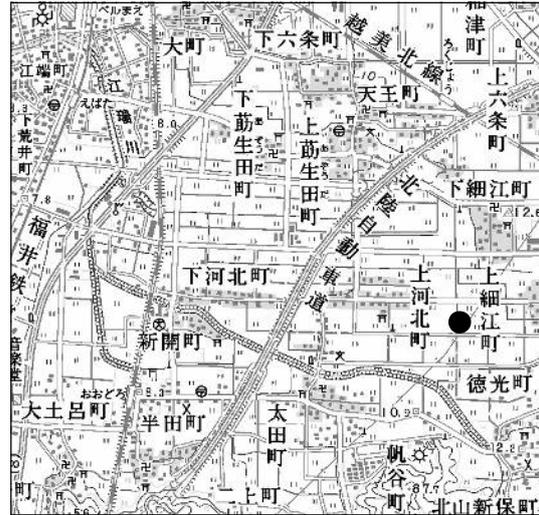
所在地：福井市上河北町

調査原因：一般県道徳光福井線道路改良工事

調査期間：令和元年7月1日～12月27日

調査面積：1,380 m²

時代：弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 上河北江原町遺跡は、福井平野の東南部、上河北の集落とその西側に広がる弥生時代から中世にかけての遺跡です。遺跡の範囲内で一般県道徳光福井線道路改良工事が行われることとなったため、工事に先立ち令和元年度から令和2年度にかけて、工事予定地内の発掘調査を行うこととなりました。

今回発表する令和元年度の発掘調査では、現代の水田の下から、今から1,700年ほど前の弥生時代終わりごろの建物跡や溝、多くの土器などが見つかりました。

遺構 平地式建物と竪穴式建物が各1棟、掘立柱建物4棟以上とそれを含む柱穴・小穴約430基、溝71条などが見つかりました。

今回見つかった平地式建物は、一辺7mほどの四角く巡る溝の中に6基の柱穴が並んでいました。竪穴式建物は、一辺6mほどの四角い形に地面を掘りくぼめたものです。

掘立柱建物は、縦横4×5～6×3mのものが4棟見つかりました。このうち1棟は、布掘りといわれる、溝を掘ってその中に複数の柱を建てる構造をしています。

調査範囲の中央付近では柱穴や柱穴の可能性が考えられる小穴が密集して見つかりました。これらの穴からは柱の根元や柱の下に敷いた板が残っているもの、植物を敷いたものがありました。また、柱を抜いた後の穴に捨てたのか、たくさんの土器が入ったものも見られました。柱穴があまりに密集しているため、1棟1棟の建物を識別することは難しいですが、掘立柱建物や平地式建物が建っていたと推測できます。

この柱穴が密集した範囲の周りで10条ほどの溝が見つかりました。これらの溝は、それより北側で遺構が急激に少なくなるので、集落の境など土地を区画するために掘られた溝である可能性があります。また、平地式建物の溝が含まれているかもしれません。

遺物 弥生時代終わりごろの土器が、溝や竪穴式建物などから見つかりました。このほか、溝から青銅製の鏃が、竪穴式建物から管玉などの玉類とその原料となる石材が出土しました。

まとめ 見つかった土器はいずれも弥生時代終わりごろのものなので、遺構もこの時期のものと考えられます。今回の調査では、掘立柱建物や平地式建物などが建った弥生時代終わりごろの集落の様子をとらえることができました。 (吉田悠歩)



溝から見つかった土器

柱穴などが密集した範囲。下の写真のような遺物が見つかった。



柱穴から見つかった柱の根元



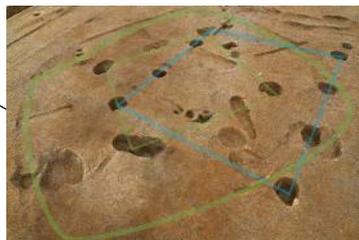
柱穴の中に敷いた板



柱穴の中に敷いた植物



柱穴の中に捨てられた土器



平地式建物と掘立柱建物

平地式建物は6基の柱穴（内側の緑色の線）の周囲に溝（外側の緑色の線）が廻る。掘立柱建物は8基の柱穴が四角く並ぶ（水色の線）。



布掘りの掘立柱建物

4本の溝が四角く並ぶ（水色の線）。それぞれの溝の両端には柱穴が掘られている。

上段 発掘調査区北半部



掘立柱建物

下段 発掘調査区南半部



竪穴式・平地式建物

発掘調査は、調査区を南半と北半に分けて行った。

どちらの写真も上が北側。

とくべつ し せきいちじょうだにあさくら しいせき
16. 特別史跡一 乗谷朝倉氏遺跡

(第152次)

所在地：福井市城戸ノ内町

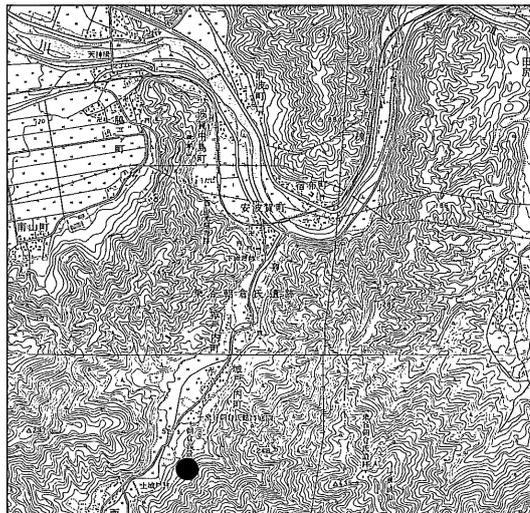
調査原因：史跡整備

調査期間：令和元年7月22日～9月3日

調査主体：一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査面積：80 m²

時代：室町時代



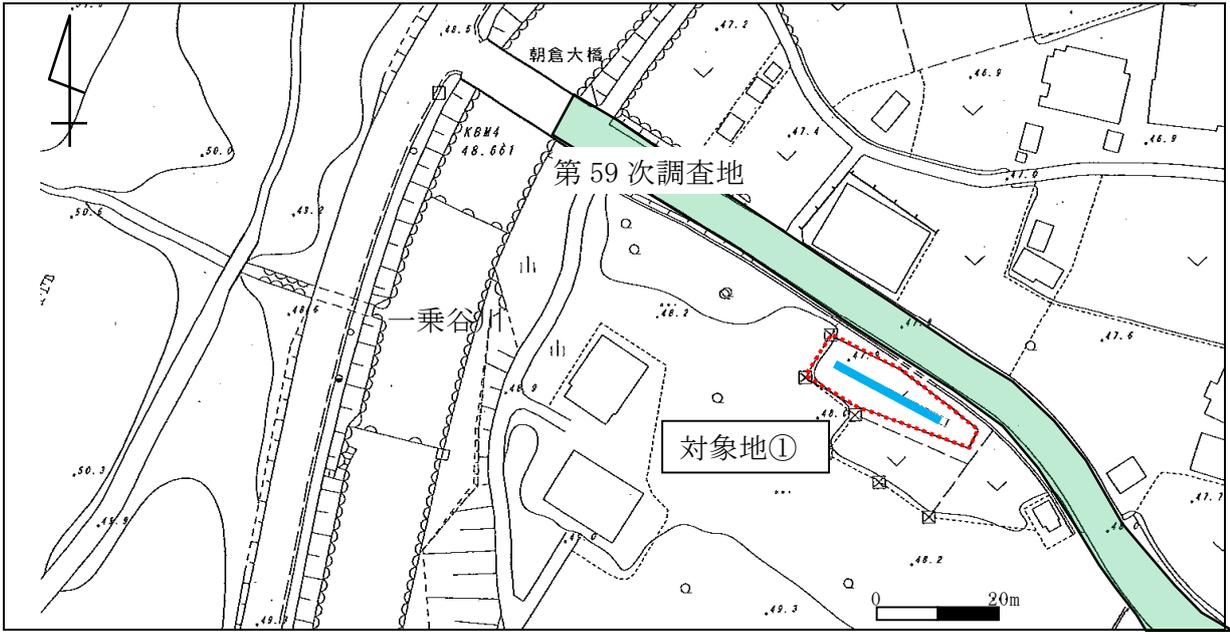
位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 令和元年度は平成29年度に公有地化された4カ所について、遺構の遺存状況や内容・性格を確認する目的で発掘調査を行いました。対象地①(字上川原)、対象地②(字上蛇谷)、対象地③・④(字米津)の4カ所に合計6本のトレンチを設定しました。対象地①は朝倉館の前に広がる新馬場の北側に位置しています。第59次調査区の南側にあたるため、第59次調査で確認された遺構が南に延伸するのかが確認する目的がありました。対象地②は諏訪館の下、第124次調査区の北側に位置しており、川際の狭小な平坦面となっています。第124次調査区では、金製刀装具の工房が確認されています。対象地③・④は第124次調査区の南側に位置しています。第124次調査区より1段高い平坦面にあたり、その南半部にトレンチを設定しました。対象地④の南ではガラス工房を確認しており、字米津一带は工房群であることが近年の調査成果で明らかになっています。対象地③・④にも工房が存在するのかが確認する目的で調査を行いました。以下、対象地ごとに遺構・遺物を報告します。

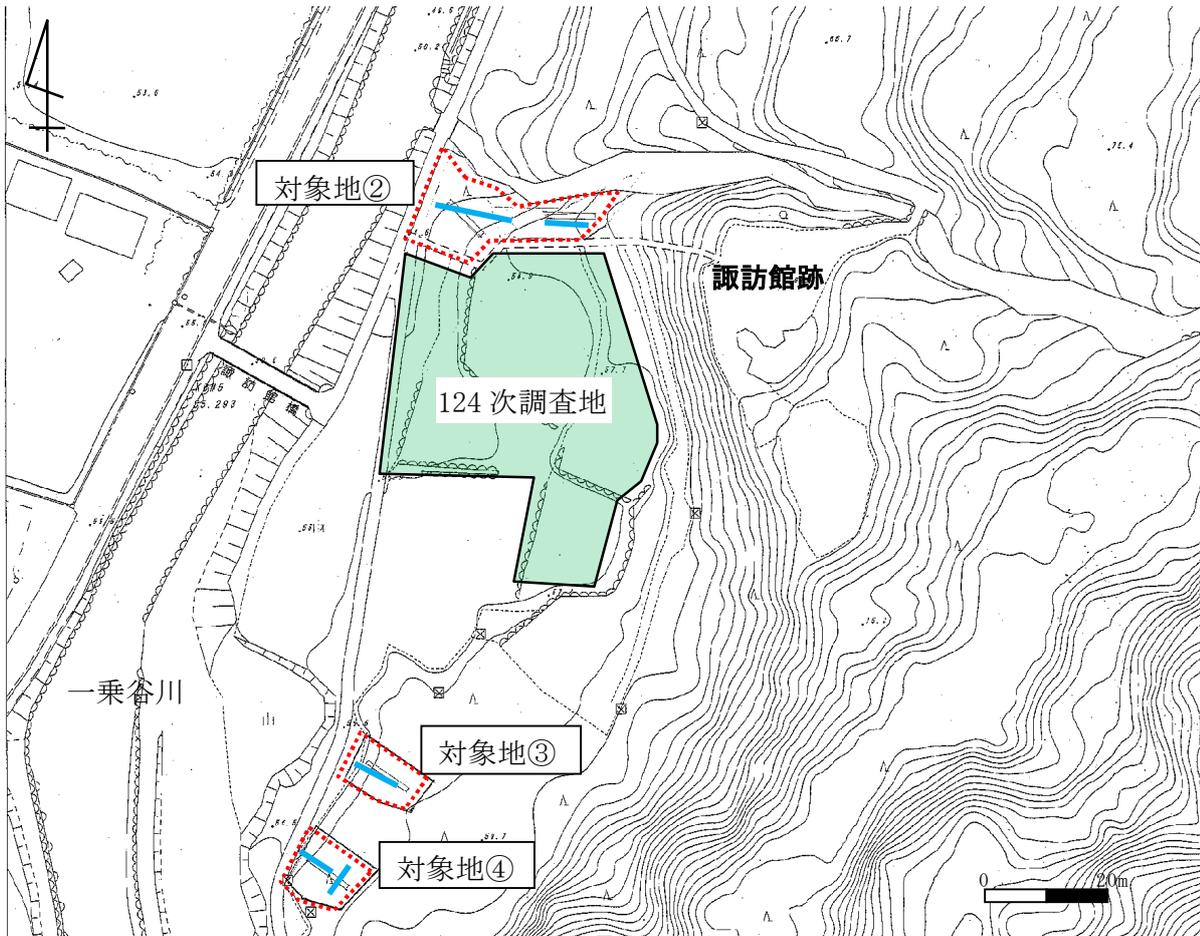
対象地①

遺構 現代の耕作土の直下に特殊石積遺構と呼ばれるS X 3594とS X 3593が確認できました(写真1)。第59次調査で記録された位置から南に直線的に遺構が延伸していることが判明しました。折れ曲がる様子は確認できないため、まだ南側に延伸するものと推定できません。この遺構は石と砂で造られており、ただ盛り上げたような状態で雑然としたつくりです。一乗谷に通有の石組溝や土塁石垣など屋敷地の区画に伴う施設は丁寧に造られていますが、それとは雰囲気が異なります。一乗谷の最終段階と考えられる越前焼をはじめとする遺物がこの遺構の中に含まれており、特殊石積遺構は一乗谷が焼失した後、江戸時代にいたるまでの極めて短い期間に構築されたと推定できます。特殊石積遺構の下層には礎石が据え付けられた遺構面が確認でき、さらにその遺構面より下層で溝状の遺構が構築されている遺構面が確認できました。対象地①の周辺は少なくとも3時期にまたがる生活面が確認でき、その遺構の遺存状態もかなり良好であることが明らかになりました。

遺物 室町時代の土器・陶磁器が主な遺物です。ほとんどは遺構検出面を覆う遺物包含層から破片の状態出土しました。



令和元年度発掘調査地位置図① (赤枠が対象地 青色がトレンチ)



令和元年度発掘調査位置図②

対象地②

遺構 対象地②は川と第124次調査区の境に造られている遊歩道に囲まれた狭小な平坦面になっています。対象地の上下に2本のトレンチを設定し、調査しました。上段のトレンチでは今回の調査対象地より一段上に存在する平坦面との段境が確認できました（写真2）。遺構面を覆う流土内には、大きな石が複数含まれていましたが、現状では段境に石積みが構築されていたのかどうか判断できない状態でした。下段のトレンチでは、一乗谷川に近い下部のほうでは、第124次調査で確認されていた段境の石積SV6122の続きを検出できました（写真3）。上部では、緩やかに上り勾配となり、隣にある遊歩道斜面に沿う形で石積が確認できました。今回の調査は狭小なトレンチ調査のため、転落石の除去がうまく行えませんでした。このため断言はできませんが、遊歩道がもともと石垣を伴う土塁を利用して造られている可能性が高いと考えます。

遺物 室町時代の土器・陶磁器が主な出土遺物ですが、出土数も少なく破片資料ばかりでした。生活空間として利用されていた可能性は低いと推定できます。

対象地③・④

遺構 対象地③・④は第124次調査区の南側に存在する一段高い平坦面にあります。合計3本のトレンチを設定し、調査しました（写真4～6）。対象地④のトレンチからは、焼土が集中して出土する地点もありましたが、炉などの遺構は確認できませんでした。対象地は過去に田畑に利用されており、この影響もあるのかもしれませんが。遺構が確認できない部分を利用して、部分的に断ち割り調査を行いました。調査の結果、整地層が2層存在することが明らかとなり、少なくとも2時期の遺構面が存在する可能性が高まりました。掘削土について表土以外の土を持ち帰り、水洗で微細遺物の確認を行いました。

遺物 室町時代の土器・陶磁器が主な出土遺物です。ただし、遺物包含層からトリベ状の土器片が出土しました。水洗による選別作業で、釘や錐状工具と推定される小型の鉄製品、水晶製数珠玉を確認することができました。数珠玉が製作されていたのかどうかは不明ですが、出土品に工具が含まれており、やはり工房的な性格が伺われます。

まとめ 対象地①・③・④では、複数期にまたがる遺構面を確認することができました。特に対象地①では良好に遺構が確認でき、その周辺も良好に遺構が遺存しているものと推定できます。対象地②では土塁が存在する可能性が高まり、新たな課題となりました。対象地③・④が位置する字米津は、これまでの調査経過の通り、やはり工房群が集中する可能性が高いことが判明しました。今回の調査は狭小なトレンチ調査でしたが、今後は計画調査の中で一定の面積を発掘調査することによって、各地区の性格や内容、利用の実態を明らかにしていく必要があります。（宮崎 認）



写真1 対象地① (西より)



写真2 対象地②上段 (西より)



写真3 対象地②下段 (西より)



写真4 対象地③ (北東より)



写真5 対象地④東側 (北東より)



写真6 対象地④西側 (東より)

えちぜんこくふかんれんいせきちょうさ
17. 越前国府関連遺跡調査

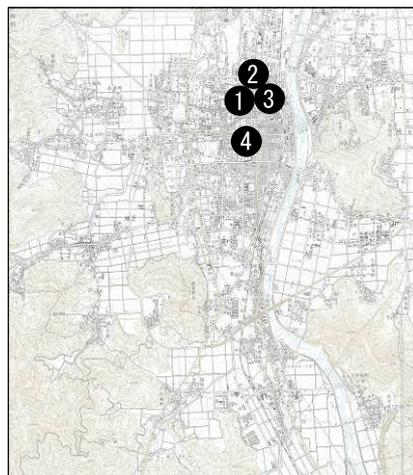
所在地：市内4箇所を実施（表1のとおり）

調査原因：越前国府関連遺跡調査事業

調査期間：平成31年4月24日～令和2年3月12日

調査面積：29.94 m²（5箇所合計）

時代：奈良時代～近世



位置図（S=1/50,000）

調査の概要 越前市は越前国府の所在地として知られてはいるものの、現在までその正確な位置についてはわかっていません。そこで、「越前国府関連遺跡調査」では、武生地区の市街地を中心に越前国府推定地エリアを設定して試掘・発掘調査を行い、これまでに100箇所以上の調査を実施しています。遺構は未だ見つかっていませんが、越前国府に繋がると思われる遺物が出土しています。今回の報告では、令和元年度内に行われた越前国府関連遺跡調査事業に関わる4箇所の試掘結果について概略を報告します。

① 新善光寺城跡（京町一丁目地係、京町三丁目地係） 調査地は、総社大神宮の北隣駐車場（京町一丁目地係）及び境内（京町三丁目地係）に位置しています。平成26年度に当該地付近で実施した調査では、柱穴1基を含む遺構や、須恵器、土師器等の遺物が発見されています。

北隣駐車場調査の結果、調査区南側では現状地盤から25cmの厚さでガラを多く含む黒褐色土の表土が堆積し、以下、20cmの厚さでいぶい黄褐色土、30cmの厚さでいぶい黄橙色土、その下層からは浅黄褐色土の地山が確認されました。遺構は、土坑1基、ピット4基が発見されました。遺物は、須恵器片1点やかわけ、越前焼のすり鉢片が少量出土しました。さらに、2基のピットからは越前焼小片1点と陶磁器小片1点が発見されました。調査区北側では現状地盤から20cmの厚さで橙色土の表土が堆積し、表土直下から大火によるものと思われる焼土層を確認しました。以下、10cmの厚さでいぶい赤褐色土、30cmの厚さで灰赤色土、その下層からは浅黄褐色土の地山が確認されました。なお、遺構は確認されず、遺物は掘削土中からかわけ片等が数点出土しました。これらのことから、調査区北側は火事層が見られたのみで、調査区南側に遺構の広がりがあることが分かりました。

境内調査の結果では、調査区南側では現状地盤から5cmの厚さで表土が堆積し、表土直下から大火によるものと思われる焼土層を確認しました。以下、10cmの厚さで橙色土、10cmの厚さで褐灰色土、55cmの厚さで黒褐色土、その下層からは褐灰色土の地山が確認されました。調査区北側も同様の層序でした。なお、いずれの調査区からも遺構・遺物は発見されませんでした。

平成26年度に発見された柱穴に対応する柱穴の確認を想定して調査を進めましたが、以上の調査結果からは、遺構の広がりには至りませんでした。

② 国府遺跡（本多一丁目地係） 調査地付近では、平成18年度に発掘調査を実施しており、かわらけや越前焼、木製品等が出土しました。また、平成20年度から21年度にかけて実施した試掘調査では、須恵器や緑釉、かわらけ、越前焼、伊万里焼等が出土しています。

今回の調査の結果、調査区北西側では現状地盤から35cmの厚さでにぶい黄褐色土の表土が堆積し、以下、5cmの厚さで黄褐色土、5cmの厚さで黒褐色土、15cmの厚さで褐灰色土、10cmの厚さで明黄褐色土、10cmの厚さで褐灰色土、その下層からはにぶい黄橙色土の地山が確認されました。遺物は、表土直下の黄褐色土から地山上面の褐灰色土までの中から須恵器小片や越前焼小片が出土し、陶器片や胡椒瓶等の現代のものも散在していました。

調査区南西側では現状地盤から40cmの厚さで灰黄褐色土の表土が堆積し、以下、15cmの厚さでにぶい黄橙色土、15cmの厚さでにぶい黄褐色土、その下層からは黄橙色土の地山が確認されました。遺物は、表土直下のにぶい黄橙色土から地山上面のにぶい黄褐色土までの中からかわらけ小片や陶器片等が出土しました。

いずれの調査区においても地山上面まで現代の遺物が混在していたことから、調査地は既に攪乱を受けているものと考えられます。このため、今回の調査地では遺構が検出されませんでした。

③ 京町三丁目遺跡隣接地（京町一丁目地係） 調査地は、国分寺東側の場所であり、「京町三丁目遺跡」に隣接しています。平成20年度から21年度に調査地付近で実施した調査では、須恵器やかわらけ、越前焼の他、近世から近代においての大火の痕跡と考えられる炭や燃土、焼けた瓦等が確認されました。

今回の調査の結果、現状地盤から20cmの厚さで褐灰色土の表土が堆積し、以下、40cmの厚さで火事跡と思われるにぶい赤褐色土、10cmの厚さで浅黄橙色土、20cmの厚さで黒褐色土、その下層からは黒色土の地山が確認されました。遺物は、掘削土中から越前焼小片や現代陶器片が少量出土しましたが、今回の調査地では遺構が検出されませんでした。

④ 竜門寺城跡（本町地係） 調査地は、竜門寺境内に位置し、「正徳元年府中絵図」（1711年）によると、既に竜門寺境内となっています。調査地付近では、平成21年度に調査地の北東に位置する「卍が辻」駐車場造成の際に試掘調査を実施しており、遺構は確認されていませんが、須恵器や青磁細片が出土しました。

今回の調査の結果、現状地盤から50cmの厚さで礫を含む暗褐色土が堆積し、コンクリート片や近現代の陶磁器片や瓦片、ガラス片が含まれていました。これらは、過去に建設されていた工場解体の際に混入したと推定されます。表層以下の序層としては、40cmの厚さで褐色土、60cmの厚さでにぶい黄褐色土、その下層からは地山と思われる褐灰色土が確認されました。この層からさらに掘削した結果、灰黄褐色土の礫層が確認されました。調査地南側には竜門寺城跡の土塁が存在しており、今回の調査地は本堂が建っている区画（土塁の内側）よりも低い土地となっているため、土塁外にめぐる堀跡の可能性も考えられます。遺物は、表土直下の褐色土中から、かわらけ小片が2点ほど出土したのみで、遺構は検出されませんでした。

まとめ 令和元年度の越前国府関連遺跡調査は、国府に関連する遺構の検出には至りませんでした。しかしながら、新善光寺城跡で検出された数箇所の遺構や、竜門寺城跡の堀跡推

定地、さらに近世から近代に数度発生した武生大火の痕跡なども確認でき、武生地区の市街地の歴史を知る上で大きな成果を得られたと考えられます。

(小川直希)

表 1

地図番号	遺跡名	年代	遺構	遺物	その他
①	新善光寺城跡	平安～近世	土坑、ピット	須恵器片、かわらけ片、越前焼すり鉢片、陶磁器小片など	火事層検出
②	国府遺跡	奈良～平安	なし	須恵器小片、越前焼小片、陶器片、胡椒瓶	
③	京町三丁目遺跡 隣接地	平安～近世	なし	越前焼小片、現代陶器片	火事層検出
④	竜門寺城跡	中世	なし	かわらけ小片、陶磁器片、瓦片、ガラス片など	調査地は堀跡の可能性あり



新善光寺城跡北隣駐車場 調査区全景



新善光寺城跡北隣駐車場 遺構全景



新善光寺城跡北隣駐車場 出土遺物



新善光寺城跡北隣駐車場 遺構内出土遺物



新善光寺城跡境内 焼土層断面



国府遺跡 北西側調査区全景



国府遺跡 北西側調査区出土遺物



京町三丁目遺跡隣接地 調査区全景



京町三丁目遺跡隣接地 出土遺物



竜門寺城跡 調査区全景



竜門寺城跡 出土遺物

18. 杣山城跡 (居館跡)

そまやまじょうあと きよかんあと

所在地：南条郡南越前町阿久和、中小屋、社谷
調査原因：内容確認調査（史跡整備事業）
調査期間：令和元年7月23日～令和2年3月31日
調査主体：南越前町教育委員会
調査面積：約750㎡
時代：室町時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 杣山城跡は、中世の荘園「杣山荘」に所在し、瓜生氏により鎌倉時代末期に築城されたといわれています。南北朝時代には越前における南朝方の拠点となった城で、その後も越前国守護の斯波高経、斯波氏の家老で越前国守護代を歴任した甲斐氏が居城とし、朝倉氏の時代にはその家臣、河合安芸守宗清が城番を務めるなど長い歴史をもつ城です。

標高492mの杣山山頂には、本丸を最高峰とし東西の尾根には御殿が築かれ礎石建物が確認されています。また、杣山城下北側の谷では開口部に「二ノ城戸」と呼ばれる濠と土塁が築かれ、谷の中ほどには山城を背にした広大な敷地に城主の居館を構えています。他にも宇名や地割りなどから家臣の屋敷跡や社寺の存在が推定されます。

今回の調査は居館跡の整備事業に伴うもので、「一ノ城戸」と呼ばれる土塁と濠が存在する地区を中心に、土塁の形状や石積みの残存状況を確認しました。

遺構 居館跡では、過去の調査により14世紀末から15世紀後半までの遺構が確認されていますが、概ね15世紀前半を境に敷地を拡張し館を造り替えられています。今回調査した「一ノ城戸」の土塁もこの時期に造り替えられ、石積みを設けたことが確認できました。

遺物 今回の調査では主だった遺物は出土していませんが、屋敷地からは過去の調査において土師質土器皿、越前焼、瀬戸美濃焼、中国製陶磁器（青磁・白磁）、瓦質土器などが出土しています。

(玉村幸一)



居館跡全景



土塁の石積み

なか い せき 19. 中遺跡

所在地：敦賀市中

調査原因：倉庫建設

調査期間：令和元年8月30日、9月5日

調査主体：敦賀市教育委員会

調査面積：約56㎡

時代：古墳時代中期～後期



位置図 (S=1/50,000)

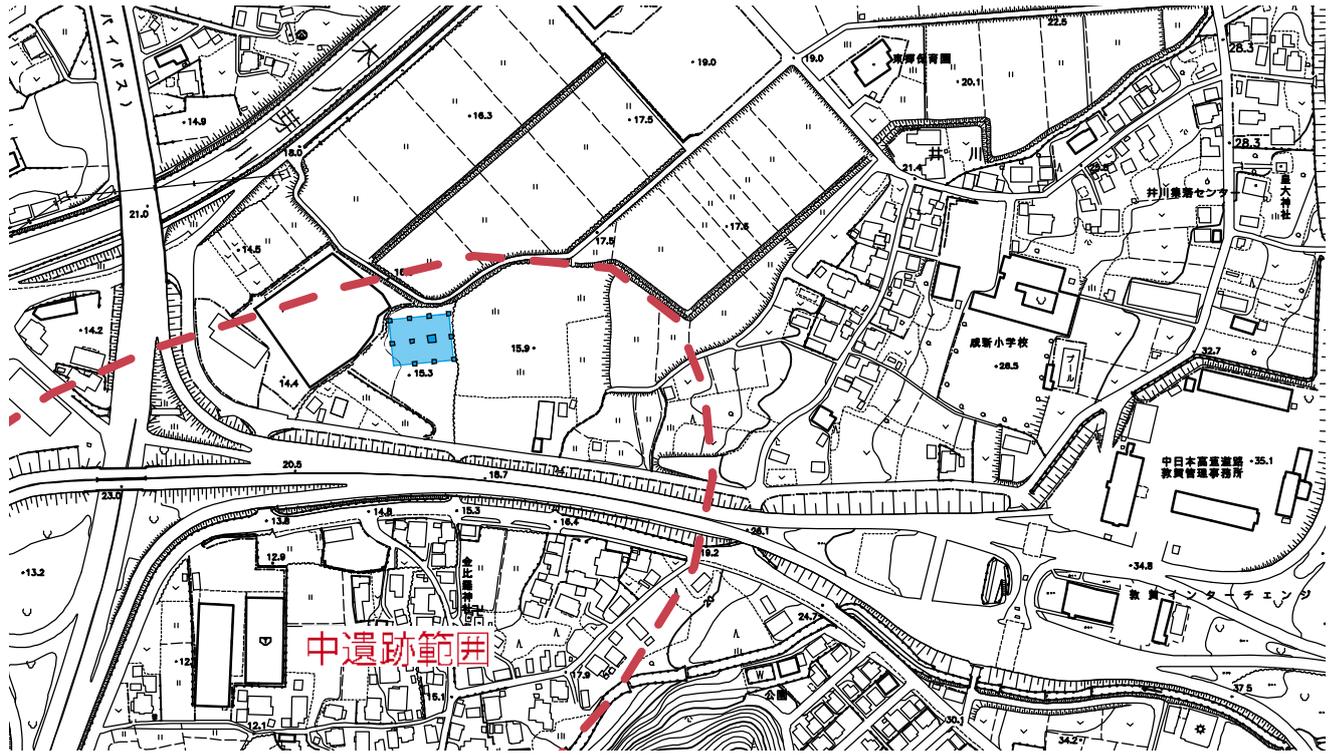
調査の概要 中遺跡周辺では、弥生時代後期から平安時代の遺物が見つっていますが、明確な遺構は確認されていません。今回の調査では、既存造成地における建設予定の倉庫基礎部分で、地下に掘削が及ぶ地点において試掘調査を行いました。

遺構 現地地表下150cmまで掘削が及ぶ基礎部分11ヶ所において試掘坑を設定し、地下の状況を確認しました。北側のNo.1～4トレンチでは、約1mの造成土の下には粒の粗い川砂などがあり、調査地から北に約150m離れた木ノ芽川からの洪水堆積と判断されました。その下には湿地を示す土層、さらに下は大ぶりの礫層でした。No.1～4トレンチから南に約15m離れたNo.5～8トレンチでは、5、6、8はそれまでと同様の洪水堆積でしたが、No.8の洪水砂内に須恵器片が混じっており、No.7には洪水層がなく低湿地層内に古墳時代中期の須恵器片、不明土師器片が多く出土しました。さらに南側のNo.9～11トレンチでは、低湿地層がなくその下の礫層のみが確認され、遺物も出土しませんでした。

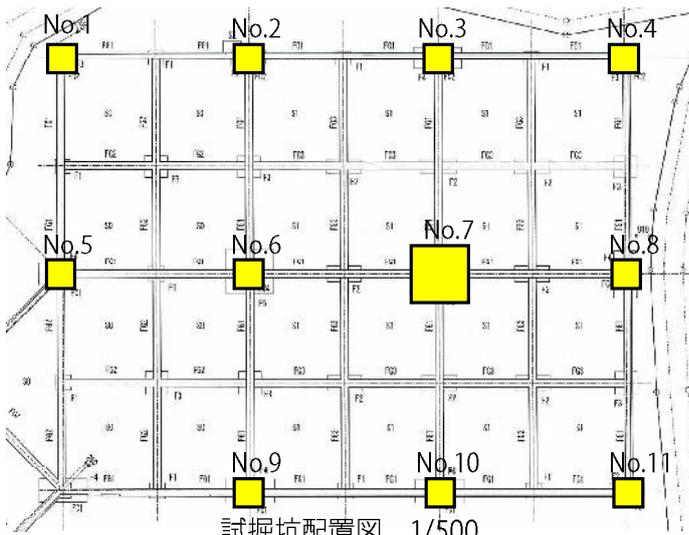
これらのことから、調査地は南から北へ緩やかに低くなっていく低湿地であり、その湿地部分に古墳時代中期の段階で捨てられた土器がかたまっていた状況で、その後洪水により北側が削られ、また南側は土地の造成などで削平を受けたものと推測されました。

遺物 須恵器は有蓋高坏などであり、脚部端にやや退化した凸帯を付ける形状から判断して、古墳時代中期後葉から後期(TK23～47期)のものです。土師器は小片で形状が分かるものはありませんでした。

まとめ 今回の調査では、以前の中遺跡での調査同様、明確な遺構は検出できませんでしたが、低湿地の堆積物に遺物が多く含まれるといった事例を確認することができました。今後は当遺跡の周辺を含めて調査例を増やし、居住域の解明を目指したいと考えます。
(中野拓郎)



中遺跡周辺詳細図 1/5000



試掘坑配置図 1/500



試掘調査風景



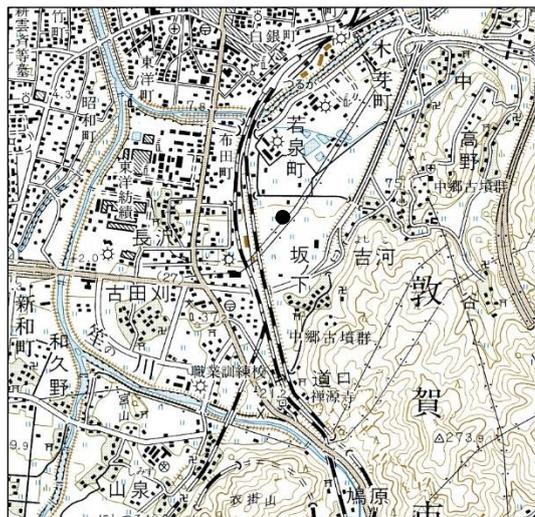
No.7 トレンチ土層写真



出土須恵器(有蓋高坏身、脚部2)

おおまちだいせき
20. 大町田遺跡 (第5地区)

所在地：敦賀市樋ノ水町
調査原因：北陸新幹線建設事業
調査期間：平成31年4月1日～令和元年6月28日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：2,100 m²
時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古代、
中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 大町田遺跡は敦賀平野の東部、笙の川が形成した扇状地上にあります。平成20年には敦賀市教育委員会が、平成29年には福井県埋蔵文化財調査センターがそれぞれ発掘調査をおこない、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての建物や河川、土器などがみつかっています。今回の調査は遺跡範囲の北部にあたり、調査前の状況は水田でした。

遺構・遺物 今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての河川がみつかりました (NR1・2)。NR1は調査区の中央西側でみつかり、位置関係などから、平成29年調査の際に2-①地区で確認された河川と一連のものと考えられます。NR2は調査区の南西端から中央部にかけて約40mにわたって確認しました。下流側(北側)をNR1に切られており、NR1よりも古い時期の河川であることがわかります。遺物は中～上層で比較的残りの良い土器片がみつかりました。なお、調査区の北側は耕地整理の際にかなり削られてしまったようで、遺構は確認できませんでした。遺物は、比較的包含層の残りの良かった南側を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器のほか、古代・中世の土器もみつかりました。

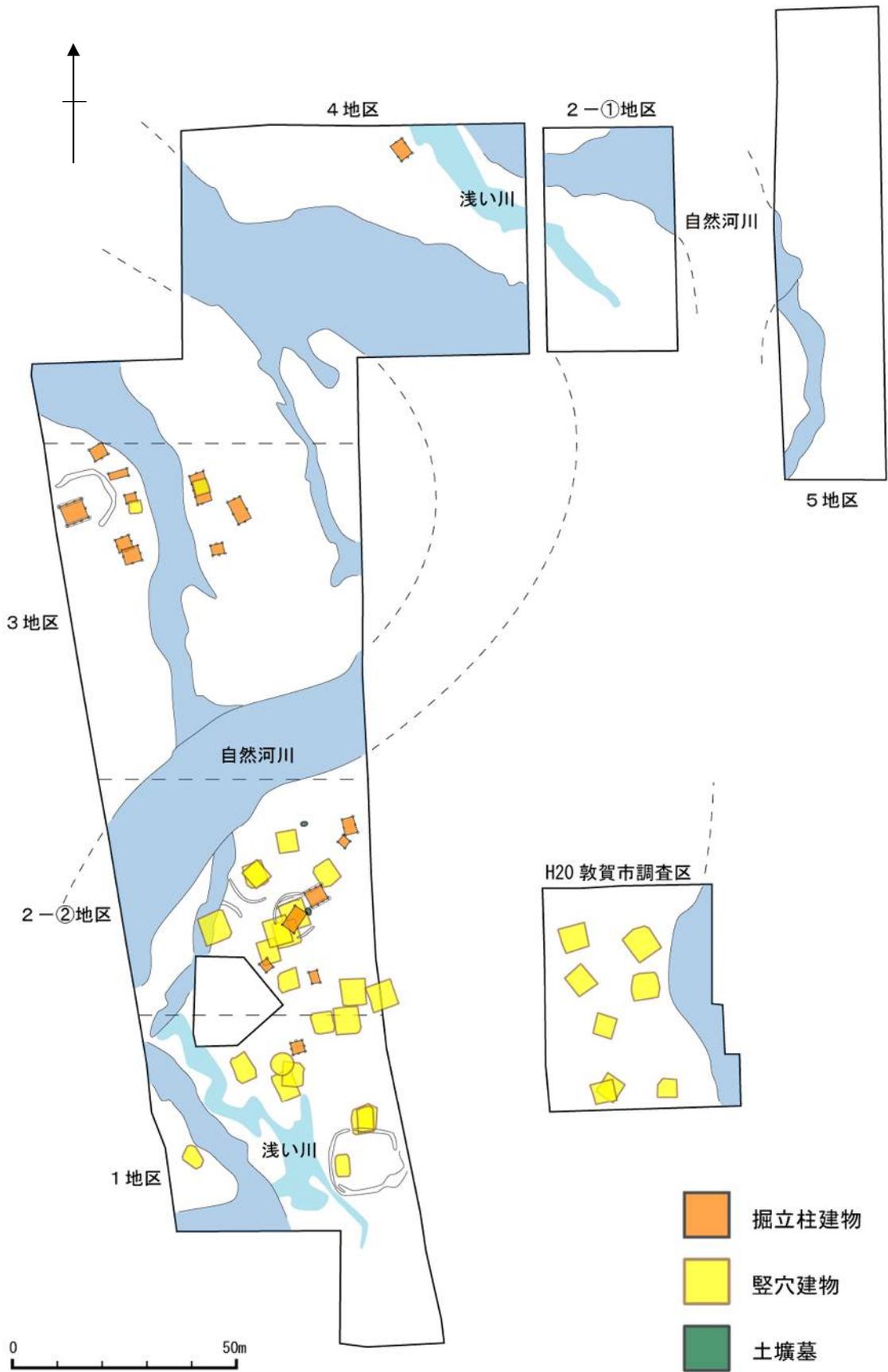
まとめ 今回の調査では、建物などの遺構は確認できませんでしたが、河川から多くの土器が出土しました。おそらく当時の集落は、調査区の上流側(南側)にまで広がっていたのではないかと想像されます。
(安達俊一)



調査区全景 (北西から)



NR2 土器出土状況 (南東から)



大町田遺跡調査区全体図

くつみいせき 21. 沓見遺跡

所在地：敦賀市沓見

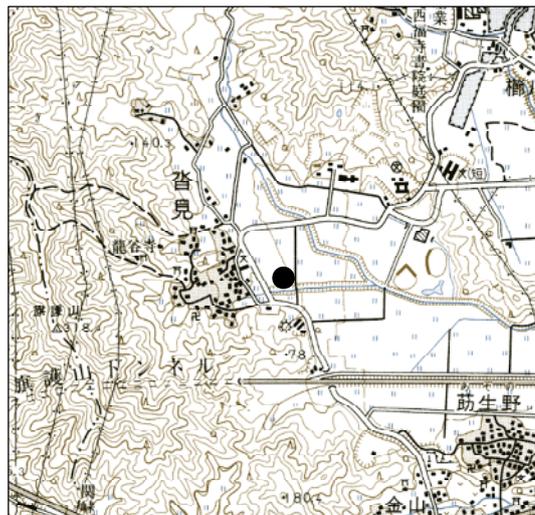
調査原因：経営体育成基盤整備事業（ほ場）

調査期間：令和元年11月1日～12月27日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：2,000 m²

時代：古代、中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 沓見遺跡は敦賀平野の西部、三味線川の支流である五反田川が形成した扇状地の扇中央部にあります。古墳時代から中世の遺物散布地として知られ、現状は水田・畑地でした。今回の調査は、ほ場整備に伴うため池工事によるもので、令和元年度は工事範囲のうち2,000 m²を対象に調査をおこないました。

遺構・遺物 調査の結果、河川の跡が2条見つかりました (NR1・2)。

NR1は調査区の北側で見つかりました。両端は調査区の外へと延びています。幅は最大6m、深さは0.5m以上あります。周囲には網目状に無数の小さな川が広がり、上層に黒い粘土が堆積していることから、比較的流れの緩やかな川だったことがわかります。川の中からは、平安時代頃 (約1000～900年前) の土器 (須恵器・製塩土器・白磁など) が見つかりました。

NR2は調査区の北東端で見つかりました。江戸時代から明治時代ころの川の跡で、陶磁器や瓦が見つかりました。

ほかに、直径20～30cmほどの小穴が19基見つかりましたが、遺物もなく、時期や性格は不明です。また、建物を構成するようなものもありませんでした。

まとめ 土器のみ見つかった状況や、調査区内で明確な生活の痕跡がみとめられなかったことから、平安時代から鎌倉時代にかけての集落は、おそらく調査区の上流側 (西側) の現沓見集落周辺にあったと考えられます。 (安達俊一)



須恵器坏

須恵器甕



須恵器甕

製塩土器

白磁椀

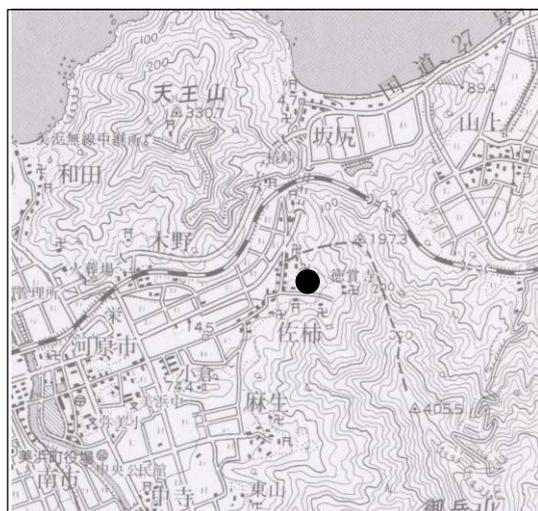


調査区遠景（東から）

22. 佐柿奉行所跡

（准藩士屋敷跡）

所在地：三方郡美浜町佐柿地係
調査原因：国吉城址史跡公園整備事業
調査期間：令和元年8月1日～12月22日
調査主体：美浜町教育委員会
調査面積：80㎡
時代：江戸時代末期



位置図(S=1/50,000)

調査の概要 美浜町では、国吉城址とその周辺遺跡群を含む歴史的景観の保存整備を図り、史跡公園として活用するため、平成12年度より確認調査を実施しています。令和元年度第20次調査は、前年度に引き続いて佐柿城下の准藩士屋敷跡について、遺構確認調査を行いました。

遺構 佐柿町奉行跡の西に、幕末に小浜藩預りとなった水戸浪士を収容した「准藩士屋敷」跡があり、北面と西面に石垣が残されています。近年まで畑作が行われていましたが、現在は放置されています。

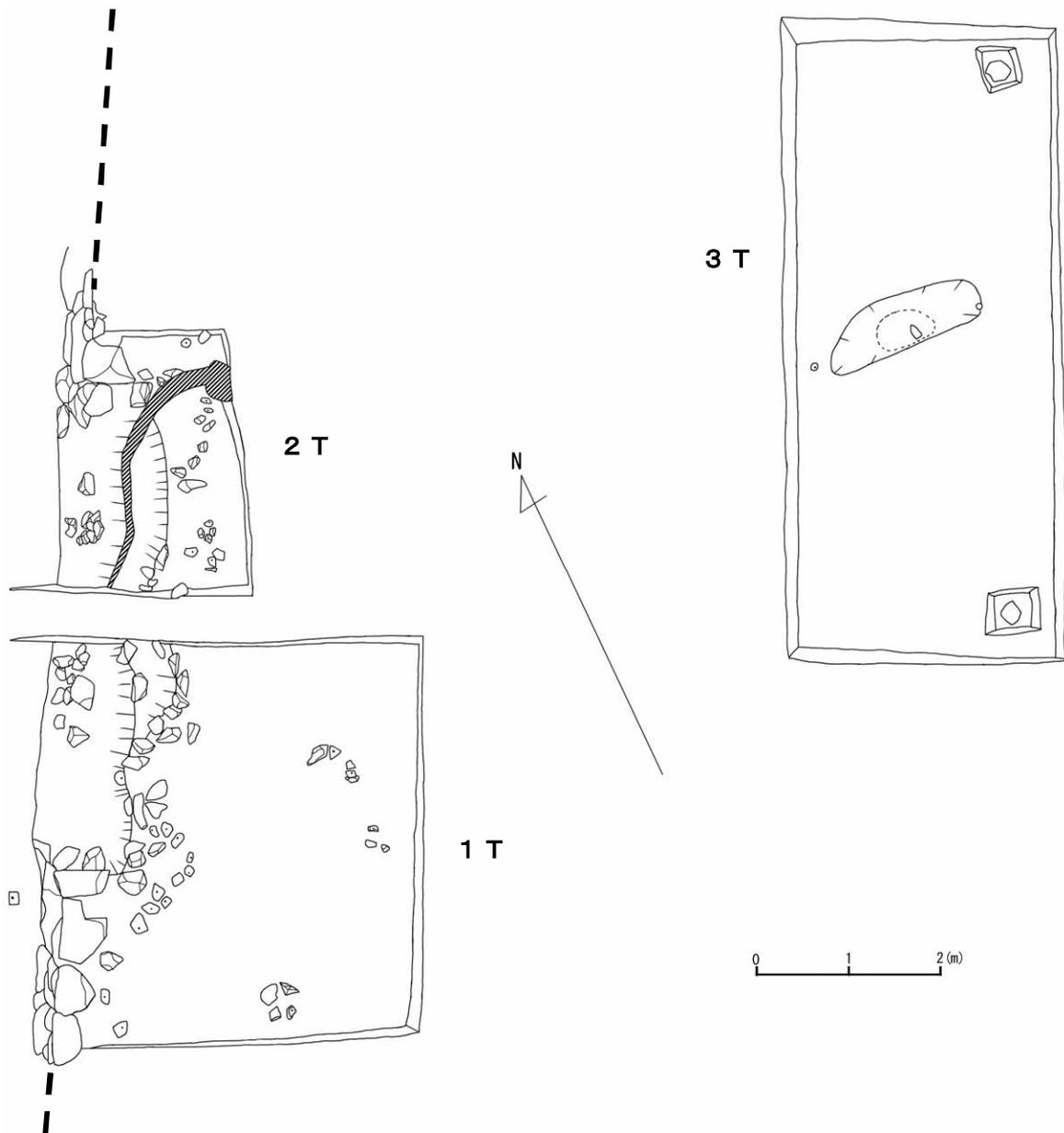
明治150年を迎えた平成30年度、初めて幕末史跡である当地の調査を行いました。既存石垣のうち、西面中央部は約4mに渡る盛土部分について、屋敷地に上がる石段や門跡の存在を想定して調査(1T、2T)しましたが、石垣を撤去した状況を確認し、昔は全面石垣造りであったことが判明しました。

今次調査は、1T、2Tの石垣天端平面部の再精査と、石垣遺構に近い屋敷地西側中央付近に南北方向の3Tを設定して掘り下げました。史料には、門2ヶ所、将校屋敷1棟、長屋4棟、役所1棟、牢屋1棟があったと伝わり、いずれかの痕跡の確認が期待できました。しかし、当該地は近年まで畑作が行われており、表土下で平石を2基検出しましたが、耕作土中であり、下層からも若干の陶磁器編やボタン片が出土したことから、耕作地の境界等に設置した近現代の痕跡と考えられます。耕作土下で比較的叩き閉められた礫混じりの硬質土面を検出し、土坑1基を検出しましたが、これ以外には礎石や遺構や検出できませんでした。時期的にわずか150年前の遺構のため、近代以降の耕作によって遺構面が削平された可能性が高いと思われます。

遺物 極めて少量の陶磁器片のほか、三又の束尻の石鎚と思われる金具が出土したのみです。

まとめ 建物痕跡は確認できませんでしたが、藪化した屋敷地東側は広範で、建物遺構の残存も期待できます。また、石鎚の出土は、史料にある「牢屋」との関連が想定されます。

(大野康弘)



准藩土屋敷跡調査区平面図



1 T、2 T精査状況（南西より）



3 T精査状況（北東より）

こぜんないせき 23. 高善庵遺跡

所在地：三方郡美浜町興道寺

調査原因：内容確認

調査期間：令和元年11月12日～11月29日

調査主体：美浜町教育委員会

調査面積：11.5 m²

時代：不明（古代か）



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 美浜町興道寺小字高善庵では昭和初期に焼きひずんだ古瓦の採集があり、瓦窯が存在することが想定されてきました。平成15年度・平成30年度に山裾の一部で部分的な発掘調査が実施され、平安時代後期から中世初期、およそ11～12世紀に伴う大規模な土地造成（盛土）の痕跡が確認され、多くの土師器皿が出土しました。また、それ以前の時代の井戸跡なども検出され、山林寺院などの宗教施設か、あるいは祭祀・宗教行為が行われた場所である可能性が浮上しました。今回の調査は高善庵遺跡の第3次調査にあたり、遺跡の広がりを確認するために1か所で発掘調査を行いました。

遺構 東に向かって緩やかに傾斜する山裾にあたり、現在は高低差のある2段の平坦面をもつ地形です。今回の調査地は標高が低い側の平坦面に位置し、堆積層下の地山面で3基の柱穴が東西に延びる柱穴列1基と、小穴7基が見つかりました。出土遺物がほとんどないため、これらの遺構の年代は不明です。堆積土から古墳時代後期の須恵器片1点出土するとともに、地表面で平瓦片1点が見つかりました。

まとめ 今回の調査でも瓦窯は発見できませんでした。ただし、11～12世紀に行われた大規模な土地造成が今回の調査地付近まで、つまり南方に広がっている可能性が高まりました。周辺を踏査したところ、今回の調査地西側の山麓に4つの小さな平坦面があることもわかり、興道寺廃寺廃絶以後、『東寺百合文書』に記述が見られる天台系寺院・興道寺の初期段階とも言える何らかの関係施設が調査地付近に所在した可能性が高まりました。（松葉竜司）



写真1 確認された柱穴列（西から撮影）

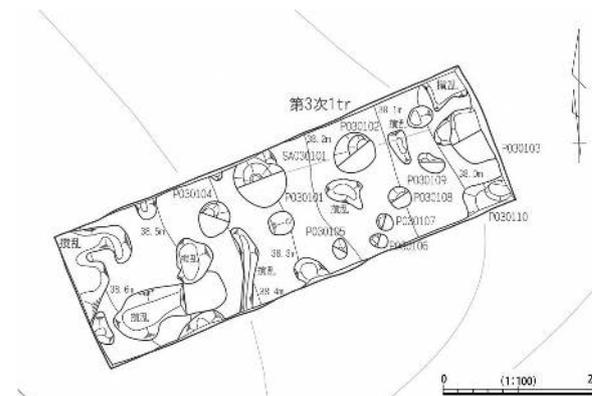


図1 高善庵遺跡第3次調査1トレンチ平面図

おばまじょうあと 24. 小浜城跡

所在地：小浜市城内1丁目

調査原因：一般国道162号道路改良事業

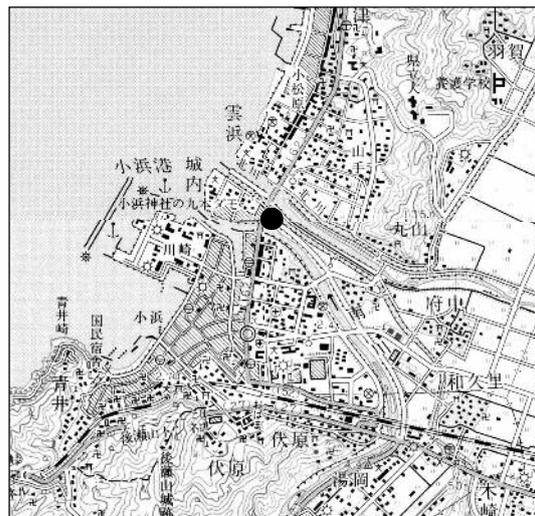
調査期間：令和元年6月3日～11月29日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：I区 263 m²

II区 192 m²

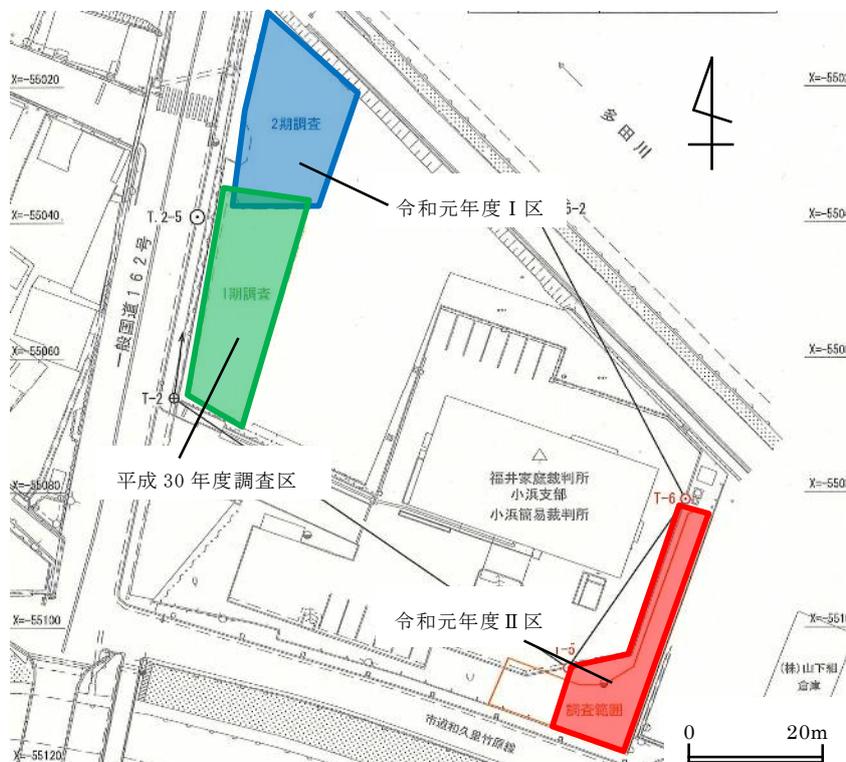
時代：江戸時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 小浜城は、北川・多田川と南川の河口に挟まれた三角洲に築かれた江戸時代の城です。慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦後、小浜藩初代藩主である京極高次によって、後瀬山(のちせやま)城から雲浜(うんぴん)の地に、拠点が移され築城を開始しました。小浜城は京極氏の時代には完成しませんでした。京極氏の後に小浜藩主となった酒井忠勝によって完成しました。明治維新まで酒井氏によって修理・維持されてきましたが、明治初期に、火事や天守の解体などにより小浜城の大部分は失われました。現在は本丸跡に酒井忠勝を祀る小浜神社が建っています。

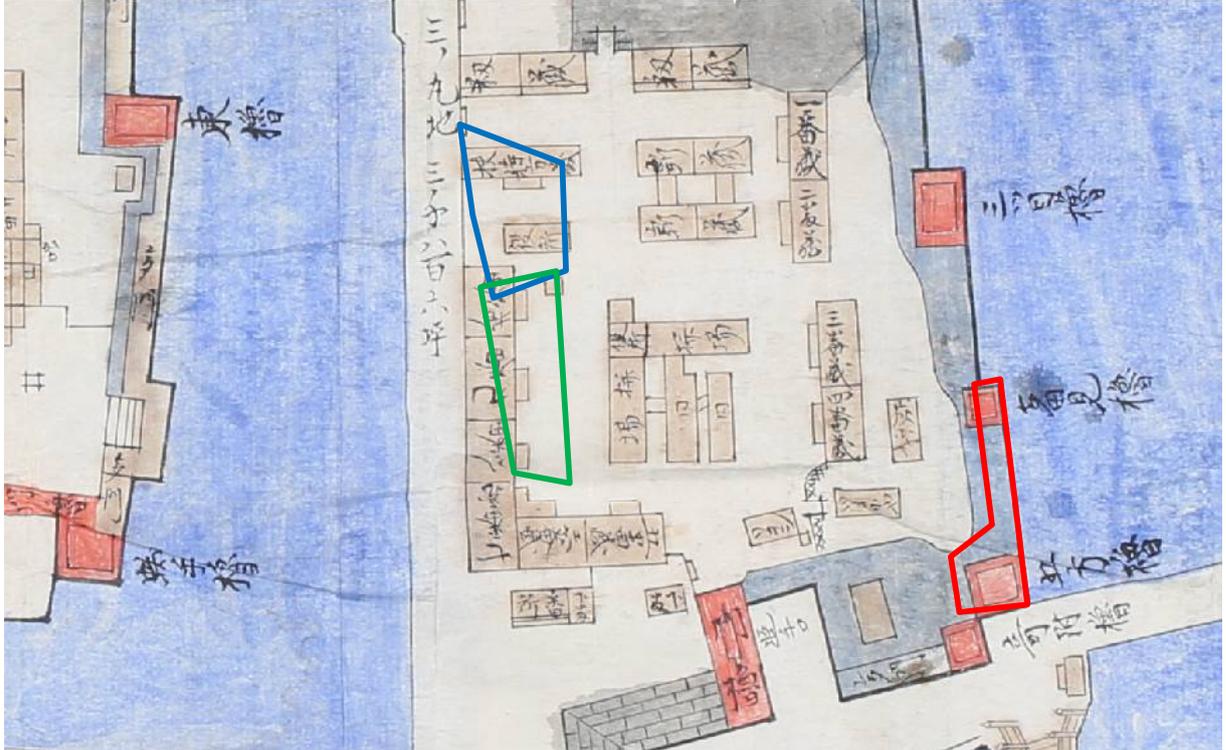
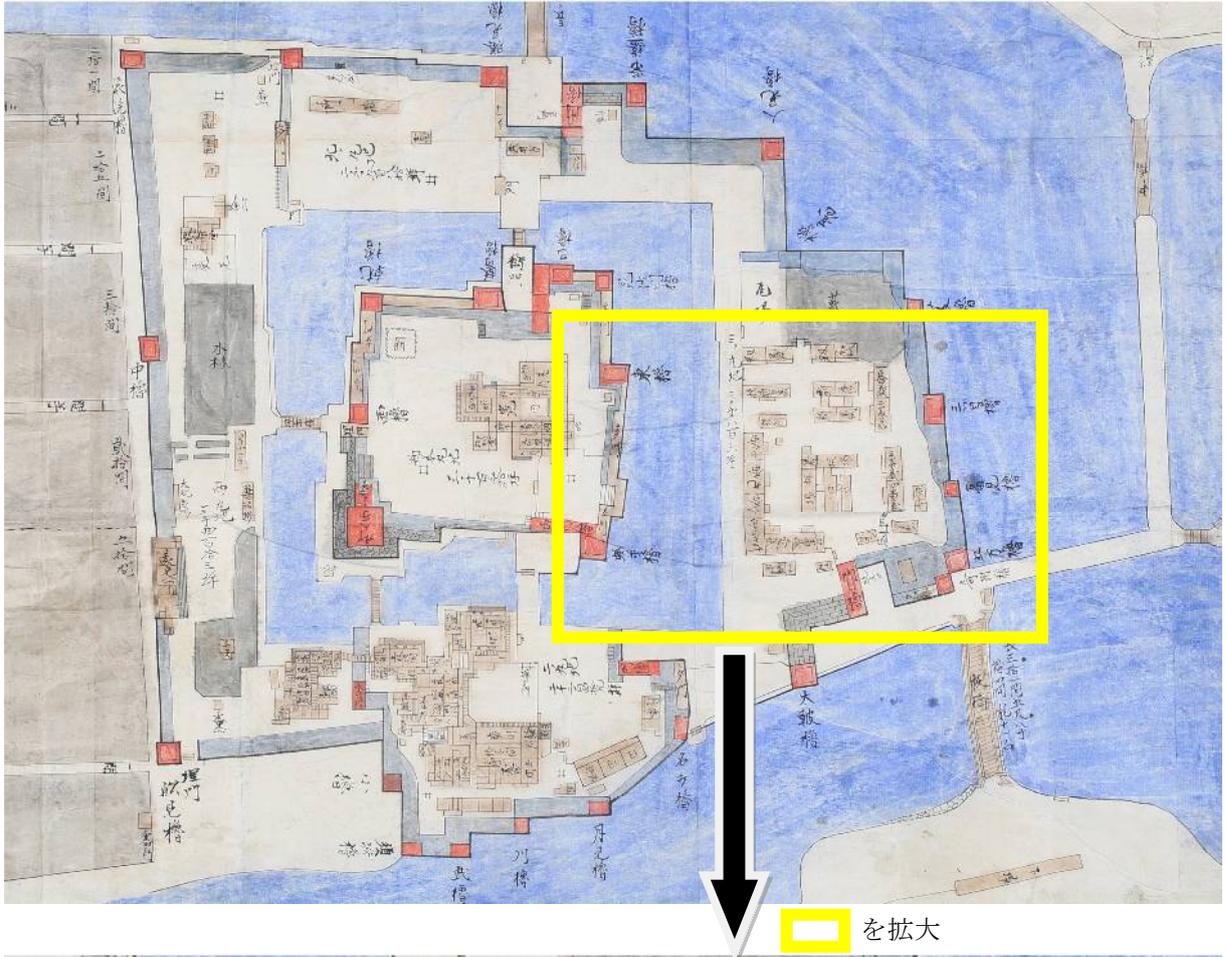
この度、国道162号改良工事に伴い記録保存を目的とした発掘調査を行いました。これに



調査区位置図 (縮尺約 1/1,100)

伴う発掘調査は平成30年度より開始しており、今年度は2年目にあたります。江戸時代後期の小浜城絵図によると、調査箇所は三ノ丸に該当し、米蔵や粃蔵および関連する役所が描かれています。平成30年度の調査では、3棟分の蔵の基礎部分石垣と各蔵の出入口となる石段を確認しました。

今年度の調査対象地は2ヶ所に分かれており地区ごとに分けて説明する。以下I区(雲浜保育所跡地)、II区(裁判所内)と呼称します。



※ 調査範囲は調査区位置図と対応させている。

小浜城絵図（部分） 福井県立若狭歴史博物館所蔵

遺構

I区（雲浜保育所跡地） 平成30年度に発掘調査を行った地点の北側にあたります。調査の結果、石垣や石列、溝などを確認しました。調査区の南側では平成30年度に検出した石垣の続きを検出しました。石垣の出隅部分を検出できたことから、絵図にある「拾番蔵」に伴う石垣であることが確定しました。調査区の北側では蔵そのものの痕跡は確認できませんでしたが、絵図にある「扶持方蔵」の石垣と石列を確認しました。

加えて、絵図には載っていない石垣と石垣の出入口となる石段を確認しました。「扶持方蔵」の下層からも石列（土塀の基礎？）を確認しました。これらの遺構は「拾番蔵」や「扶持方蔵」の造営に伴って破壊されており、基礎部分しか残っていませんでした。このことから、江戸時代の小浜城では前時代の石垣や塀などの破壊を行うような大規模な改修工事が行われていたことが明らかになりました。確証はありませんが、京極氏から酒井氏へと藩主が入れ替わる際に大規模な改修工事が行われた可能性があります。

II区（裁判所内） 絵図によると、調査箇所は三ノ丸の外縁の石垣が存在した地点に該当します。内側は「土手」などと表記されることから石垣は存在しなかったものと考えています。調査の結果、石垣と石垣の基礎を確認しました。調査区の北端では石垣を検出しました。下部の確認のために可能な限り掘り下げてみましたが、まだ下方へと続いていることから、この石垣は外堀に面する石垣であることが判明しました。石垣の東側では石積み（水路）を確認しましたが、近代から現代にかけて積まれたものです。調査区南側では石垣根石を確認しました。石垣自体はすでに削平されて残っていませんでした。この根石は絵図にある「五方櫓」に伴う石垣の根石の可能性ががあります。

遺物 出土遺物は瓦（いぶし瓦、赤瓦）、陶磁器などがありますが、ほとんどは瓦です。中でもいぶし瓦が最も多く、これは小浜城の近くで焼かれたものです。赤瓦は文献記録から、敦賀市舞崎付近で焼かれたものが運ばれてきたと考えられています。

まとめ I区では、小浜城の石垣が改修されていたことが明らかとなり、三ノ丸の変遷を示すことができました。II区では、三ノ丸外堀の石垣を確認でき、小浜城の外郭が明らかになりました。

小浜城は現在残っているのは本丸跡のみですが、地下には遺構が比較的良好的に残されていることが予想されます。発掘調査は引き続き来年度も行う予定です。今後の発掘調査を通して、小浜城の姿がさらに明らかになっていくことでしょう。 (中島啓太)



小浜城跡出土いぶし瓦（左）赤瓦（右）



小浜城跡遠景（北東より）



I区全景（南東より）



II区石垣検出（北より）



I区拾番蔵石垣検出（北東より）



II区石垣根石検出（南東より）

いしやまじょうあと 25. 石山城跡

所在地：大飯郡おおい町石山地係

調査原因：範囲確認調査

調査期間：令和元年11月27日～令和2年3月31日

調査主体：おおい町教育委員会

調査面積：40 m²

時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

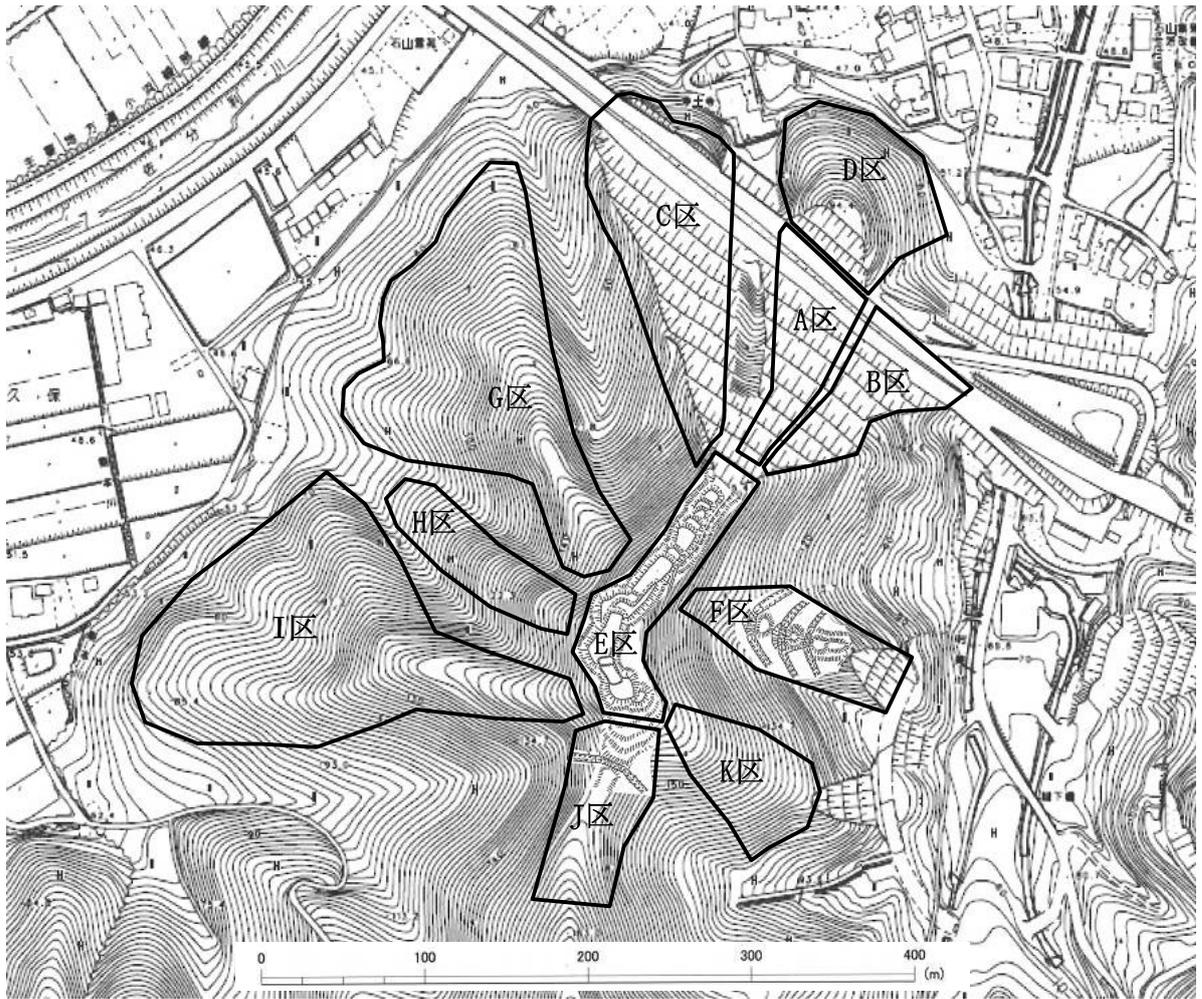
調査の概要 石山城跡は、石山集落背後の標高190mの山上に展開する山城です。主郭からは佐分利川上・中流域一帯を一望でき、県道小浜綾部線と県道坂本高浜線が交差し、この地域を支配するうえで重要な位置に城が築かれています。本城を居城とし、佐分利地区一帯を治めていたのは若狭武田氏家臣である武藤氏でした。これまで舞鶴若狭自動車道建設工事（第1次調査）及び県道坂本高浜線改良工事（第2次調査）に伴い発掘調査が行われ、郭や堀切、畝状堅堀、礎石建物跡などが確認され、青磁椀や染付皿などが多数出土しています。本調査は、石山城跡の保存活用と将来的な整備の可能性を探ることを目的とし、令和元年度は遺跡の範囲確認と、主郭から北北西に延びる尾根上にある郭群と思われる遺構の確認調査を行いました。

遺構 第1次調査時に設定された調査区（A～E区）を踏襲し、A区からK区までの11の調査区を設定（A～C区・D区の一部・E区の一部・F区の一部は道路建設工事により消滅）、踏査の結果、F～K区において郭と思われる平坦面や堀切と思われる谷状の地形を確認しました。平坦面が連続するG区を中心に遺構確認調査を行ったところ、複数の郭を確認しました。植林された場所にも数か所の平坦面を確認していることから、G区において郭の数は増えるものと思います。

遺物 今回の調査では遺物の出土はありませんでした。

まとめ 過去に作成された縄張図や調査で判明した遺構以外に、今回の調査で新たな郭や堀切などを確認することができ、遺跡の範囲は南北480m、東西480mの範囲に及ぶものと推測されます。北側と東側に遺構が集中することから、本郷地区を治めた本郷氏と高浜町を治めた逸見氏に対し備えを重視したものと考えられます。

今後は、石山城跡の全体像を探るため、遺跡の範囲確認と並行し主郭などの主要遺構の確認調査を進めていく予定です。（川嶋清人）



石山城跡調査区



G区 郭



G区 連続する郭

※この冊子は、令和2年度実施の「第35回福井県発掘調査報告会」資料となる予定でした。しかし、新型コロナ拡散防止のため、残念ながら開催が中止となりましたので、本資料のみを公開させていただきます。

ご協力いただきました、県内各市町教育委員会に感謝申し上げます。

第35回 福井県発掘調査資料

— 令和元年度に発掘調査された遺跡 —

令和2年10月29日 印刷

令和2年10月30日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター